

四 1号墳の石棺

1. 1号墳の石棺

(1) 石棺の概要 (第9・10図)

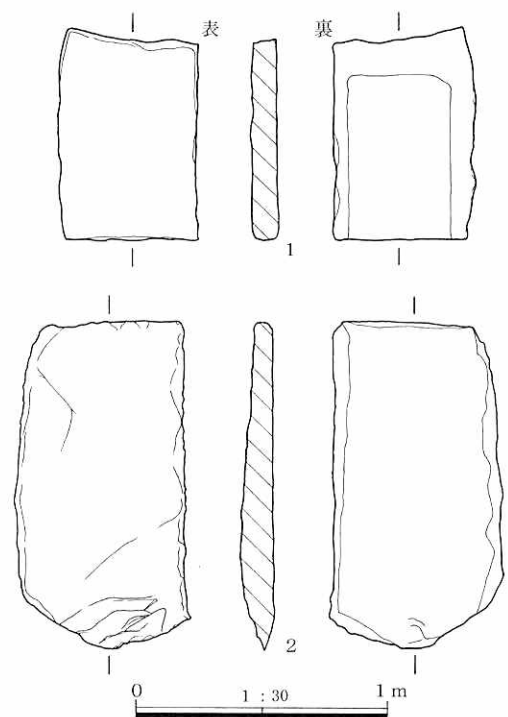
1号墳は1981年に県道213号線の拡幅工事の際に発見され、熊本県教育委員会により発掘調査が行われた。その調査成果については「阿蘇町大字山田字平原に所在する・・・安山岩の組合わせ式石棺で、全長1.87m、幅0.4mを測る。石室内からは二体分の歯と剣1、堅櫛1が発見された。墳頂はすでに削平されていたが、小円墳とみられる」と記されているのみで、正式な報告はなされていない(島津1982:p.89)。今年度、熊本県教育委員会から1981年調査時の石棺に関する実測図の写しの提供を受けることができたので、それをもとに報告する。

石棺 石棺の蓋石は2枚である。蓋石の設置場所に関する記録はないが、第9図-1の裏面に見られる加工痕が東側小口石と両長側石に対応することから、第9図-1が東側蓋石と推測できる。東側蓋石は長さ86cm、幅55cm、厚さ10cm、西側蓋石は長さ130cm、幅67cm、厚さ7~13cmである。両蓋石の縁部分には細かい加工が施されている。両蓋石があわさる部分はより丁寧に加工が施され、水平な面が形成される。石材は棺身と同じ安山岩と推測される。

石棺の主軸方向はN68°Eである。石棺は箱式石棺で、石材は安山岩である(島津1982:p.89)。棺身は小口石と長側石からなり、底石をもたない。また小口石と長側石の組み合わせ方はH字形タイプである(清家2001)。小口石はそれぞれ1枚、長側石は北側1枚、南側2枚で構成される。南側長側石は東側石材の西端面と西側石材の東端面をあわせて構成する平継ぎタイプである(清家2001)。土圧などのためか長側石の各所には亀裂が走っており、北側長側石は一部剥離している。南側長側石は側面図と平面図で長さが異なり、平面図で記録されている南側長側石の方が若干短い。平面図の原図では南側長側石の西端部分に「欠」の文字があったため、平面図の南側長側石は西端部分が欠落した後に記録されたものと推測される。このような石材の状況をふまえ、各石材の大きさを順に示すと、東側小口石は長さ40cm、幅(高さ)67cm、厚さ5cm、西側小口石は長さ41cm、幅67cm、厚さ7cm、北側長側石は長さ252cm、幅56cm、厚さ4cmとなる。南側長側石を構成する東側石材は長さ137cm、幅55cm、厚さ4~7cm、西側石材は長さ120cm(欠落部分含む)、幅60cm、厚さ5cmである。

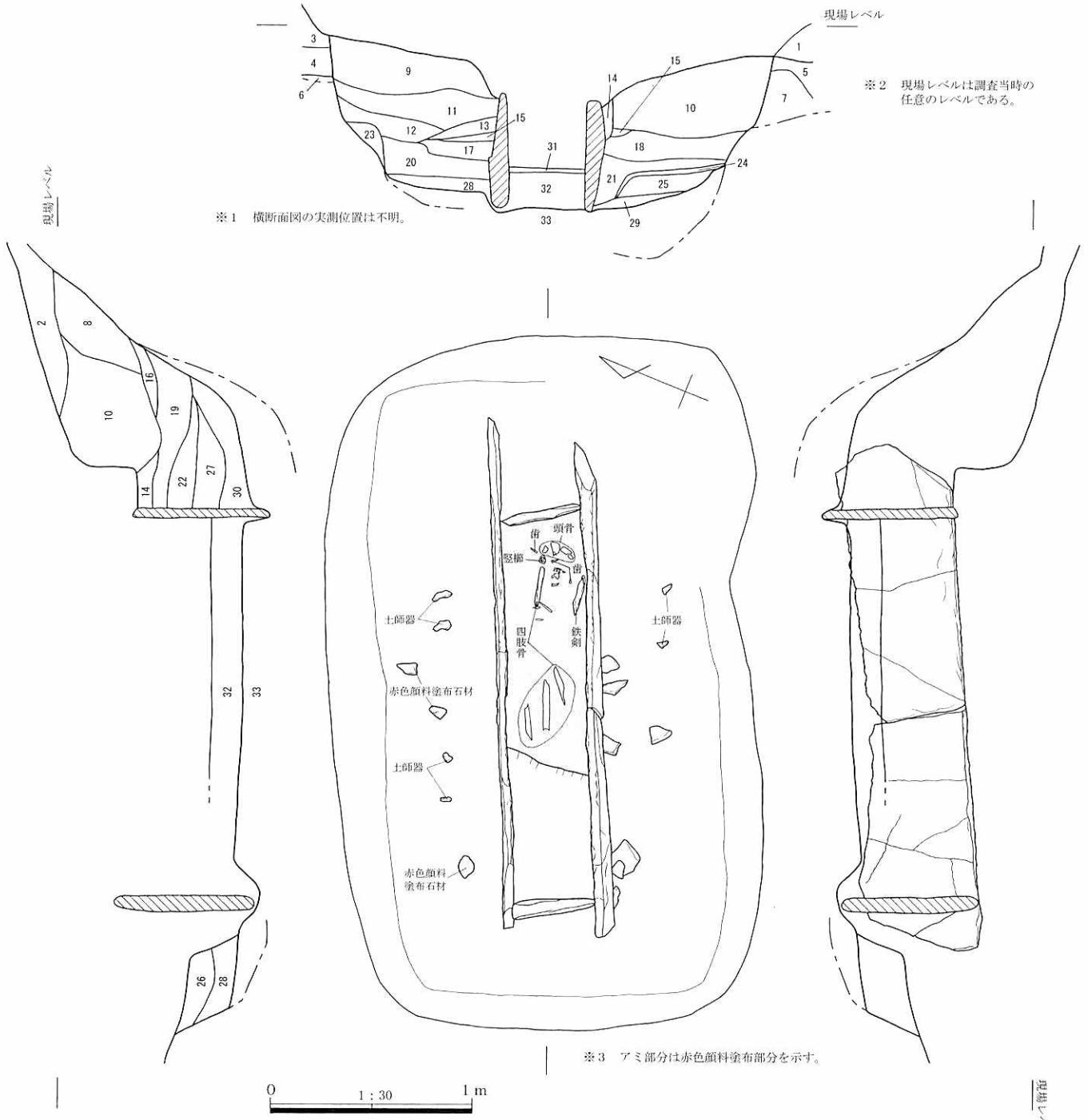
石棺の大きさを内法で示すと、棺床付近で長さが187cm、東小口幅が38cmとなる。西小口の幅は石棺上面で40cmである。深さは棺身石材上面から棺床までで最大42cmである。

また石棺の内面全体には赤色顔料が塗布されており、一部棺身石材上面にも見られる。ただ西小口から東へ70cm程度の範囲は棺床が残存しておらず、赤色顔料の塗布状況は判然としない。しかし残存する棺の内面全体では赤



第9図 1号墳石棺蓋石実測図
(1:東側蓋石 2:西側蓋石)

四 1号墳の石棺



※1 横断面図の実測位置は不明。

※2 現場レベルは調査当時の任意のレベルである。

※3 アミ部分は赤色顔料塗布部分を示す。

- | | | |
|---------------|----------------|----------|
| 1 工事による擾乱土層 | 18 黒褐色土層 | |
| 2 褐色土層 | 19 暗褐色土層 | |
| 3 明褐色土層 | 20 黒褐色土層 | |
| 4 褐色粘質土層 | 21 黄褐色土層 | 黒色土塊を含む。 |
| 5 黒色土層 | 22 褐色土層 | |
| 6 明褐色土層 | 23 黄褐色土層 | |
| 7 注記なしのため不明 | 24 黒褐色土層 | |
| 8 黒色土と褐色土の混合層 | 25 黄褐色土層 | 白色土を含む。 |
| 9 褐色土層 | 26 褐色土層 | 黒色土塊を含む。 |
| 10 褐色土層 | 27 黒色土と褐色土の混合層 | |
| 11 褐色土層 | 28 黄褐色土層 | 黒色土を含む。 |
| 12 黄褐色土層 | 29 注記なしのため不明 | |
| 13 褐色土層 | 30 褐色土層 | |
| 14 白色粘土層 | 31 赤色顔料層 | |
| 15 赤色顔料層 | 32 注記なしのため不明 | |
| 16 褐色土層 | 33 黄褐色土層 | |
| 17 黄褐色土層 | | |
- 黒色土塊と少量の軽石を含む。
 黒色土塊を含む。
 黄褐色土塊・黒色土塊・軽石・炭化物を含む。
 赤色顔料を含む。
 白色土を含む。
- ※4 (8~12: 墓壇上部埋土、13~30: 墓壇下部埋土、32: 棺床整地土、33: 地山)

第10図 1号墳石棺実測図・墓壇断面図・遺物出土状況図

色顔料が塗布されているため、残存していない棺床にもかつては赤色顔料が塗布されていたと推測される。なお断面図では赤色顔料による層（第31層）が示されており、床面一面に赤色顔料が厚く塗布されていた状況がうかがえる。

墓壙 1号墳の墓壙は長軸342cm、短軸210cmの隅丸方形の形をしている。墓壙は地山を掘り込む形で構築され、墓壙底には石棺石材を設置するための窪みが形成される。

墓壙埋土は現場レベルより45～55cm下の高さを境に下部埋土と上部埋土に分けられる。下部埋土の特徴は、性格の異なる土を細かく重ねている点にある（第13～30層）。東小口側では褐色土と黒褐色土が使用される。西小口側では層のほとんどが削平されていて判然としないが、黄褐色土と褐色土を使用している可能性がある。長側石側では黄褐色土と黒褐色土が中心である。一方上部埋土は、ほぼ同じ性格の土を一度に厚く充填しているようである。（第8～12層）。使用される土は褐色土がほとんどである。これら埋土の特徴とその位置から、下部埋土は石棺を固定することを目的としており、上部埋土は墓壙を埋めることを目的としていることが推測される。また下部埋土の上面は棺外面としての利用が行われたことも推測できる。

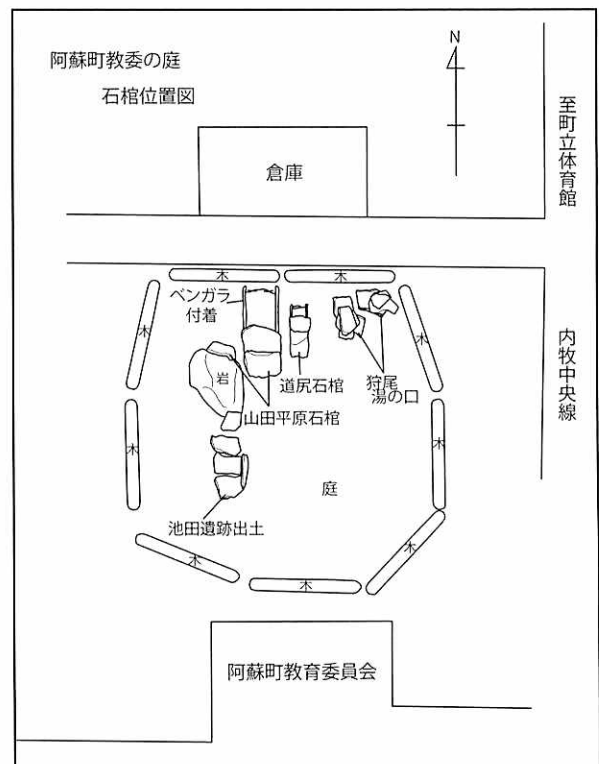
(2) 人骨・遺物の出土状況（第10図）

棺内 棺内からは人骨と鉄剣1点、堅櫛1点が出土している。人骨は2体分である（島津1982：p.89）。島津1982で述べられていた人歯の他、頭骨や四肢骨の一部と推測されるものも出土している。人歯と頭骨は東小口側で出土している。人歯と頭骨の位置は近接しているため、被葬者の頭部は原位置に近い可能性がある。このことから1号墳被葬者の頭位は東と考えられる。四肢骨は頭骨の横と頭骨から西へ70cmの場所で出土している。被葬者は伸展葬で葬られたと考えられ、頭骨の横に四肢骨があることは考えづらい。このことから厳密に棺内の人骨と副葬品が原位置を留めていたとは言えない。堅櫛は頭骨の下で出土しており、被葬者の頭部に装着していた可能性も考えられる。鉄剣は被葬者の脇に添うように出土している。鉄剣は切先を西、把を東に向ける。なお鉄剣と堅櫛の詳細は本書第七章で述べる。

棺外 棺外の長側石側から土師器片6点と赤色顔料が塗布された石材3点が出土している。南側では第10層中より土師器片が出土している。北側では第9・11層中よりそれぞれ土師器片と石材が出土している。棺外のすべての遺物が上部埋土内の出土であることから、これらの遺物は墓壙を埋め戻す際の祭祀に使用されたものと推測される。今年度、熊本県教育委員会において1号墳出土遺物の調査を行ったが、その時はこれらの土師器片と石材の調査はできなかった。今後の課題である。

2. 小結（第10～14図）

1号墳は発掘調査の後、破壊された。しかし1号墳石棺は旧阿蘇町教育委員会の中庭に移築されていると言われており、その位置を示すメモも残っている



第11図 石棺移築場所メモ

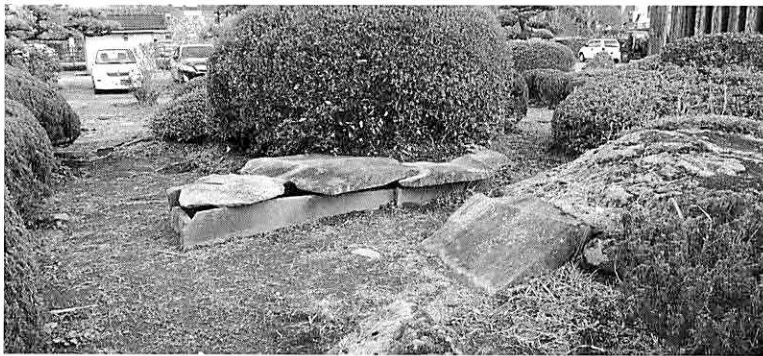
る（第11図）。また移築されたとされる石棺の存在も実際に確認した（第12～14図）。そこで、提供された1号墳石棺の実測図とともに、移築された石棺の現状も報告するために旧阿蘇町教育委員会の中庭にある石棺（第11図の山田平原石棺と同一、以下、山田石棺）の観察調査を行った。その結果、第10図で示した1号墳石棺とは異なる特徴が見られた。

山田石棺は小口石と長側石からなる（第12～14図）。小口石は北側が1枚、南側が2枚、長側石は両側それぞれ2枚ずつで構成される。1号墳石棺よりも小口石と長側石がそれぞれ1枚多い。

山田石棺を構成する各石材の長さのみを順に示すと、北側小口石は長さ50cm、南側小口石の東側石材は長さ15cm、西側石材は長さ45cmとなる。東側長側石の北側石材は長さ143cm、南側石材は石材のほとんどが土に埋まっており計測できなかった。西側長側石の北側石材は141cm、南側石材は57cmであった。1号墳石棺の東側小口石は長さ40cm、西側小口石は長さ41cmであり、山田石棺のどの小口石の長さとも合致しない。さらに1号墳石棺の北側長側石は長さ252cm、南側長側石の東側石材は長さ137cm、西側石材は長さ120cmで、山田石棺の長側石の長さとも合致しない。長側石に関しては、1号墳石棺の長側石には多数の亀裂が見られたことから、割れた石材をバラバラに組み合わせて移築されている可能性も考慮にいった。しかし山田石棺の長側石を構成する石材をどう組み合わせても、1号墳石棺の長側石の長さには合致しなかった。

また山田石棺を構成するどの石材にも、1号墳石棺を構成する石材に見られた多数の亀裂や剥離は見られなかった。

以上から、山田石棺が1号墳石棺である可能性は低いと考えられる。しかし1号墳石棺の特徴はあくまで限られた図面から読み取ったものにすぎない。そのため山田石棺が1号墳石棺であるか否かをさらに検証するためには、1号墳発掘当時の写真資料が必要である。今後1号墳石棺の写真資料が見つかり、山田石棺との整合性に関して検証がすすむと同時に、1号墳石棺の特徴ひいては1号墳の全容が明らかになることを期待する。（與嶺）



第12図 山田石棺の位置（左が北）



第13図 山田石棺の現状（西から）



第14図 山田石棺の現状（北から）

五 2・3号墳の測量調査

1. 2号墳の現状（第8・15図、図版1-1）

2号墳は6号墳から見て南東に伸びる尾根上の平坦な場所に位置する。その東側には県道213号線が通り、北西側に3号墳が近接する。なお、実際の方角と若干異なるが、便宜上第15図の測量基準点H37（2号墳墳頂）からH36（2・3号墳間）の方向を西として測量調査の成果を報告する。

2号墳の墳頂最高点の標高は512.890 mであり、墳丘斜面はほぼ一定の傾斜をなす。その斜面上には葺石の一部と思われる円礫が点在している。現状において段築の様子は判然としない。

墳丘斜面は、西側において標高509.4 m付近でほぼ水平に、南側において標高507.0 m付近で緩やかな傾斜に変化する。東、北側は墳丘斜面がそのまま崖へとつながっており、その傾斜に大きな変化は見られないが東側では標高509.4 m付近でやや緩やかな傾斜、北側では標高508.8 m付近でやや急な傾斜へと変化する。これらの変化点を墳端とすると、2号墳は東西27.6 m、南北25.8 m、高さ3.5～5.9 mの円墳と推測できる。

墳丘の周囲では南側で傾斜が緩やかになった後、標高506.3 m付近において傾斜が急になる。このことから南側には幅1.5～2.0 mの墳端平坦面が推測できる。しかし、2号墳全体では墳端平坦面は確認できない。

南東側の墳頂付近の墳丘斜面には直径3 mほどの窪みが確認される。盗掘坑の可能性もあるが、窪みの位置が墳頂ではないことから自然崩壊など他の要因の可能性も考えられる。また、北東側から南東側へかけて墳丘の周囲は、垂直に近い崖面となっている。これは県道213号線の拡幅工事の際に大きく丘陵が削平されたためであり、その削平は墳丘面には及んでいないと推測する。削平によって形成された崖面には崩落防止用のネットが設置されており、それを固定するためのアンカーピンが墳丘周囲の各所に見られる。なお現状の地形においては周溝の存在は確認できない。

墳頂平坦面は標高512.6 m以上において見られ、広さはおよそ東西10.2 m、南北6.9 mである。

2. 3号墳の現状（第8・15図、図版1-2）

3号墳は、2号墳の西側に近接して築造されている。3号墳の墳頂最高点は512.866 mであり、墳丘斜面はほぼ一定の傾斜をなす。斜面上には葺石の一部と思われる円礫が点在しており、段築の様子は現状においては判然としない。

墳丘斜面は、東側では標高509.5 m、西側では標高511.8 m、南側では標高510.7 mの付近でほぼ傾斜が水平になる。北側では墳丘斜面がそのまま崖へとつながっている。その傾斜に大きな変化は見られないが、標高509.1 m付近でやや緩やかな斜面へと変化する。傾斜変化点を線で結ぶと南側から北西側にかけて弧を描くのに対し北側と東側では直線を描く。南側から北西側では墳頂から傾斜変化点までの長さが短いことから墳丘が崩落している可能性も考えられる。3号墳の北側と東側では等高線が直線的で、南東側、北東側においては隅角が見られる。このことから3号墳は方墳である可能性が高い。西側の墳端と北側の墳端の残存部を延長した直線の交点を方墳の隅角の1つとすると3号墳は東西辺20.1 m、南北辺21.3 m、高さ1.1～3.8 mの方墳と推測できる。なお、残存すると推測した部分のみから高さの数値を出している。

墳丘周囲の南東側では標高510.0 m付近で墳丘斜面からほぼ平坦な面になり、標高509.6 m付近か

ら傾斜が急になる。このことから南東側には幅 1.5～2.5 m の墳端平坦面が推測できるが、全体においては墳端平坦面は確認できない。なお、現状の地形においては周溝の存在は確認できない。

墳頂平坦面は標高 512.6 m 以上において見られ、広さはおよそ東西 9.0 m、南北 6.3 m である。

2号墳の墳端西側と3号墳の墳端東側のあいだの距離は5～6 m となり、また2・3号墳は両者ともに6号墳から視認できる距離にある。3号墳の南西斜面では埴輪片2点、土師器片1点、須恵器片3点を採集した。なお、遺物に関する詳細は第七章で述べる。(津田)

3. 小結

今回、2・3号墳の墳丘の状況を確認することを目的とし、測量調査を行った。ここでは3号墳の墳形について他の古墳との比較検討を行ない、あわせて2・3号墳と6・7号墳の築造における地形の利用について見ていく。

今回の測量調査によって3号墳が方墳である可能性がでてきた。そこで、他の方墳との比較によって3号墳が方墳である可能性について検討したい。比較対象としては、大分県豊後大野市にある漆生古墳群の城山古墳とする。漆生古墳群は平原古墳群と同じ古墳時代中期の古墳群である。また阿蘇地域に近いことから比較対象として妥当と考える。

漆生古墳群は前方後円墳である大久保1号墳、楕円形をなす円墳である大久保2・3号墳と方墳である城山古墳の計4基からなる古墳群である。城山古墳の特徴を挙げると、墳丘の北西、北東側には隅角が見られ、南西、南東側にも隅角の一部が確認されている。そして、それぞれの隅角間の等高線は直線的である。隅角が見られることや直線的な等高線から城山古墳は南北 22.4 m、東西 25.4 m の方墳とされる(玉川 2014)。

平原3号墳は墳丘の南東側と北東側に隅角を有する。また、隅角間の等高線と北側斜面の等高線がほぼ直線をなす。隅角を有し、等高線が直線的であるなど、3号墳の墳丘形態が城山古墳のもつ特徴に近似していることがわかる。3号墳が方墳である可能性は比較的高いのではないだろうか。

次に地形利用について考えてみたい。平原2・3・6・7号墳は山の尾根上に並んで築造されている。2・3号墳の墳端間距離は5～6 m、6・7号墳の墳端間距離は6 m とそれぞれ近接しているのに対し、3号墳西側の墳端から6号墳東側の墳端までの距離は約 65 m と離れている。その間の地形を見ても傾斜が急になっており、古墳と見られるものは確認されなかった。一方、4基の古墳が築造されている場所は傾斜が緩やかである。古墳の周辺地形を観察した結果、測量基準点 H 33 (3号墳西側)・H 12 (7号墳西側) 付近など古墳から少し離れた場所も比較的傾斜が緩やかであった。つまり、古墳築造以前も古墳が築造された場所及び周辺地形の傾斜は緩やかであったと推測される。

したがって、2・3・6・7号墳は尾根の傾斜が本来緩やかな場所を利用して築造された可能性が高いと考えられる。

以上が測量調査の成果である。現段階では3号墳の墳形については方墳の可能性が考えられるものの確定的ではなく、今後発掘調査によって、その墳形を確認する必要がある。第七章にて述べるが、3号墳の築造時期は採集資料により6号墳よりも新しいことが判明している。

一方、2号墳の時期は一切不明である。2号墳の時期については、今後の発掘調査による出土遺物等から検討したい。今回の測量調査では、一定の課題を残すものの、2・3号墳の墳丘の現状を確認することができた。今後、これらの古墳の調査・検討がすすめば、6・7号墳との関係性、平原古墳群の地域性及び古墳築造技術や首長墓系譜などその他の課題の解明に繋がるだろう。(黄)



第15图 2・3号墳測量図(上:3号墳 下:2号墳)

六 6号墳の発掘調査

1. 墳丘の現状（第8・16図、図版1-3）

平原古墳群は阿蘇谷の北側、遠見ヶ鼻（大観峰）と象ヶ鼻のあいだにある尾根上に位置している。現在は植林された樹木に囲まれており、周囲の見通しが悪いが、植林以前は南東約3kmにある中通古墳群と互いに視認できたと考えられる。発掘調査を行った6号墳周辺には、墳丘南側に幅1mほどの道がある。また、墳丘の南側は緩やかな斜面が続いており、北側は急な斜面となっている。

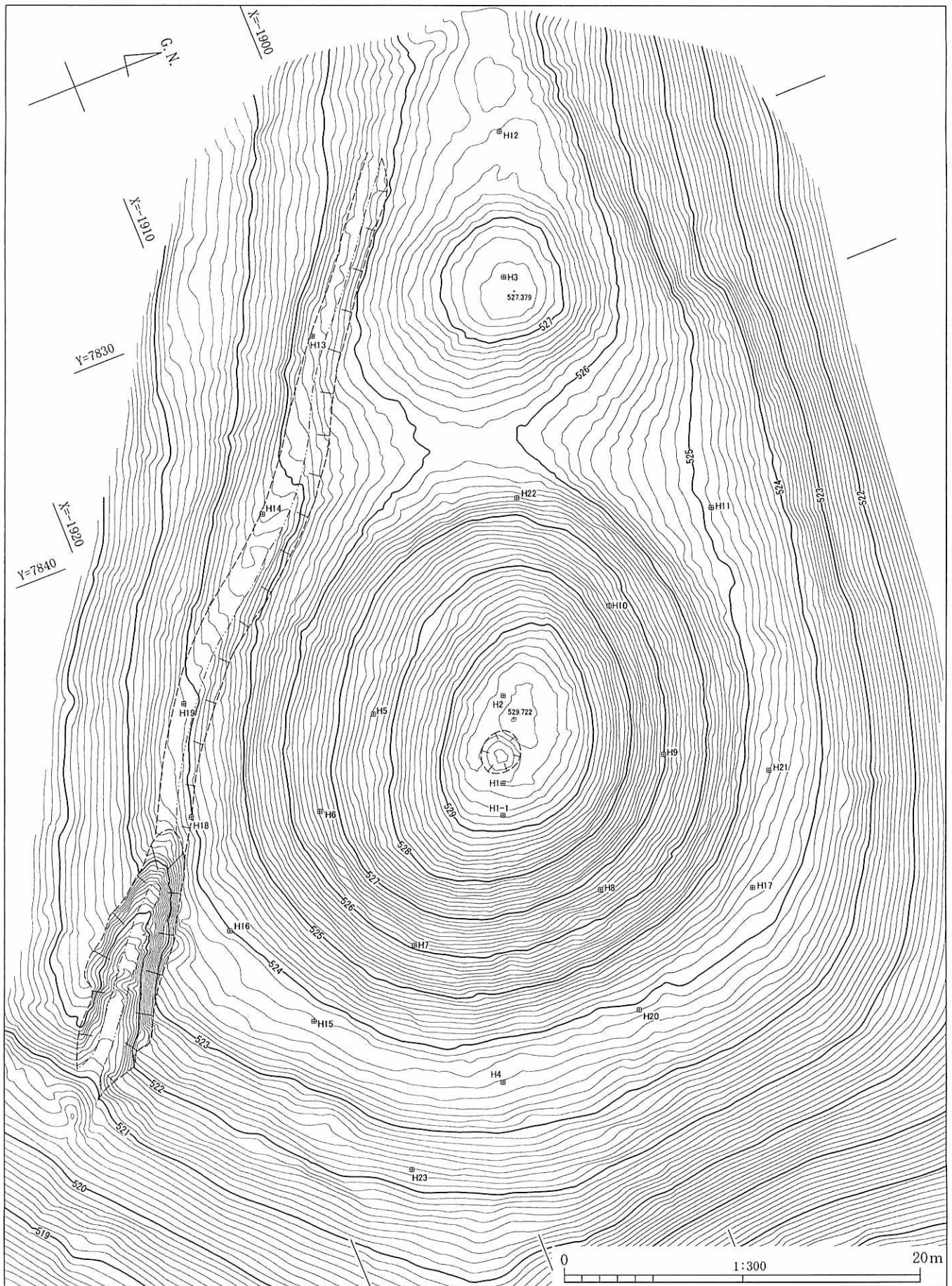
6号墳の墳頂最高点は標高529.722mで、墳丘斜面はほぼ一定の傾斜となっている。墳丘斜面をそれぞれ見ていくと、西側が標高526.3m、北側が524.9m、東側が523.9m、南側が524.6mの位置で、ほぼ水平に変化している。それらの地点を墳端と考えたとき、6号墳は東西31.3m、南北30.0m、高さ3.4～5.8mの円墳と推測される。また、墳丘の周囲は北側で524.2m、東側で523.4m、南側で523.8mの地点で傾斜が変化しているため、それぞれの地点で3mほどの墳端平坦面を推測することができる。ただし、西側に関しては墳端平坦面の様子ははっきりしない。また、周溝は確認できない。標高529.3m以上を墳頂平坦面とすると、墳頂平坦面の広さはおよそ東西9.3m、南北7.0mである。墳頂平坦面中央には樹木があり、その東側には盗掘坑と見られる窪みが存在する。

次に第五章で述べた測量調査の成果をふまえて、2・3・7号墳と6号墳の関係を見ていく。7号墳は、6号墳の西側に近接している円墳である。6号墳より高さが低く、最高点は標高527.379mである。墳丘の斜面は西側が標高526.7m、北側が526.3m、東側が526.3m、南側が526.4mの地点でほぼ水平に変化している。それらの地点を墳端と考えると、7号墳は東西11m、南北12m、高さ1mの円墳と推測される。6号墳と比較すると、7号墳の規模は6号墳より明らかに小さい。また、北側の標高525.7mの地点において傾斜が変化しており、幅1～2m程度の墳端平坦面が考えられる。西側は尾根に沿って水平な面が続くため墳端平坦面の幅は確認できない。標高527.2m以上を墳頂平坦面とすると、その直径はおよそ5mである。また、周溝は確認できない。

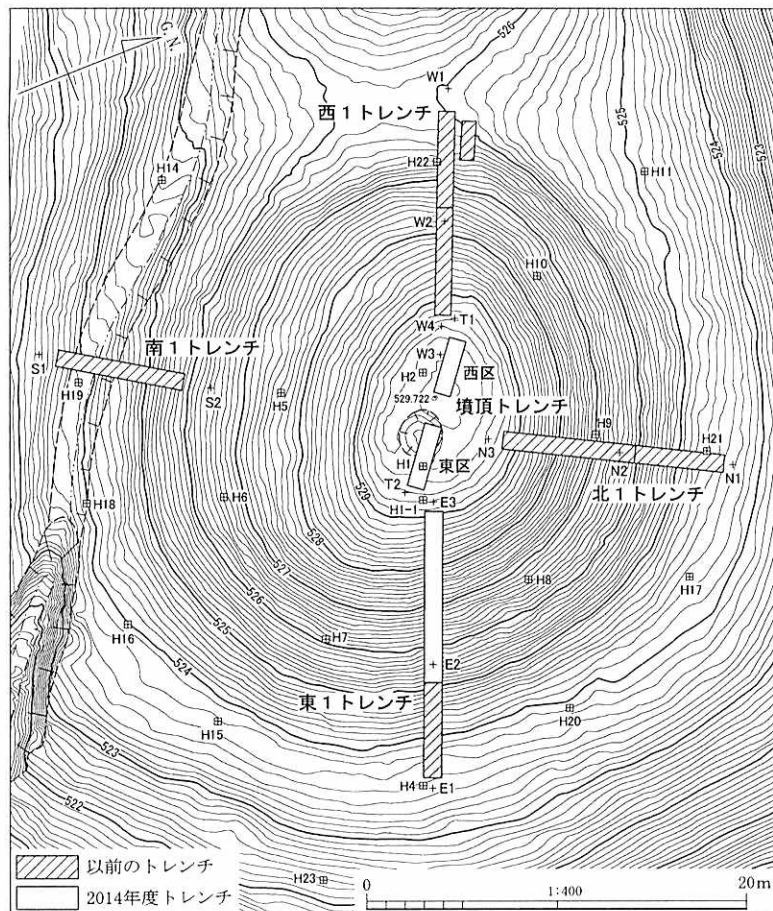
先述した2・3号墳を見ると、それら2つの古墳は近接しており、6号墳から見て、南東方向に位置している（第8図）。6号墳の東側墳端平坦面の端から2・3号墳までの斜面は急であるが、標高512m、測量基準点H33（3号墳西側）付近はほぼ水平な地形となっている。2号墳は東西27.6m、南北25.8m、高さ3.5～5.9mの円墳と推測される。6号墳と比較すると、高さはほぼ同じとなり、直径は若干小さい。また、3号墳や7号墳と比較すると高さ・直径ともに大きいことは明確である。3号墳を東西辺20.1m、南北辺21.3m、高さ1.1～3.8mの方墳と推測したとき、2号墳や6号墳より小さいことは明らかである。しかし、7号墳よりは大きい。このことから、今回の2・3号墳の測量調査の結果、現在調査されている平原古墳群南尾根グループの中では、6号墳、2号墳、3号墳、7号墳の順に規模が大きいことがわかった。

さらに、それぞれの位置関係を見ていくと、2号墳と3号墳、6号墳と7号墳の築造されている状況が類似している。6号墳の東側墳端と3号墳の西側墳端の墳端間距離は約65mであり、視認できる距離だが離れている。次に2号墳と3号墳の墳端間距離は5～6m、6号墳と7号墳の墳端間距離は6mであり、きわめて近接している。

上述した、墳丘規模の比較と墳端間距離の関係から、平原古墳群南尾根グループの4基は大型の古墳（2号墳、6号墳）と小型の古墳（3号墳、7号墳）のそれぞれ1基ずつを1つのまとまりにして



第16图 6・7号墳測量図(上:7号墳 下:6号墳)



第17図 トレンチ配置図

築かれている可能性が見えてきた。しかし、大小の2基を1つのまとまりにしている理由や各まとまり同士の関係性は不明であり、さらなる調査が必要となる。(白岩)

2. トレンチの設定 (第17図)

今年度の6号墳の調査は、埋葬施設・墳頂平坦面・段築構造の解明を目的として行われた。そこで、今年度は6号墳墳丘の東側、および墳頂部にトレンチを設定した。東側に設定したトレンチは、2012年度に調査を行った東1トレンチを墳丘東側の段築構造を解明するために、墳頂部の方向へ拡張したものである。墳頂部に関しては、埋葬施設および、墳頂平坦面構造を解明するため、6号墳の墳頂平坦面の長軸に沿うようにトレンチを設定した。ただし、墳頂部の中央付近に1本の樹木が存在していたため、その樹木を挟むよ

うに2つのトレンチを設定した。墳頂部に設定したこれら2つのトレンチのうち、樹木を挟んで西側に設定したものを墳頂トレンチ西区、東側に設定したものを墳頂トレンチ東区と呼称する。各トレンチの大きさは東1トレンチで幅1m、長さ14m、墳頂トレンチ西区で幅0.8m、長さ3m、墳頂トレンチ東区で幅0.8m、長さ3.4mである。(松浦)

3. 調査の所見

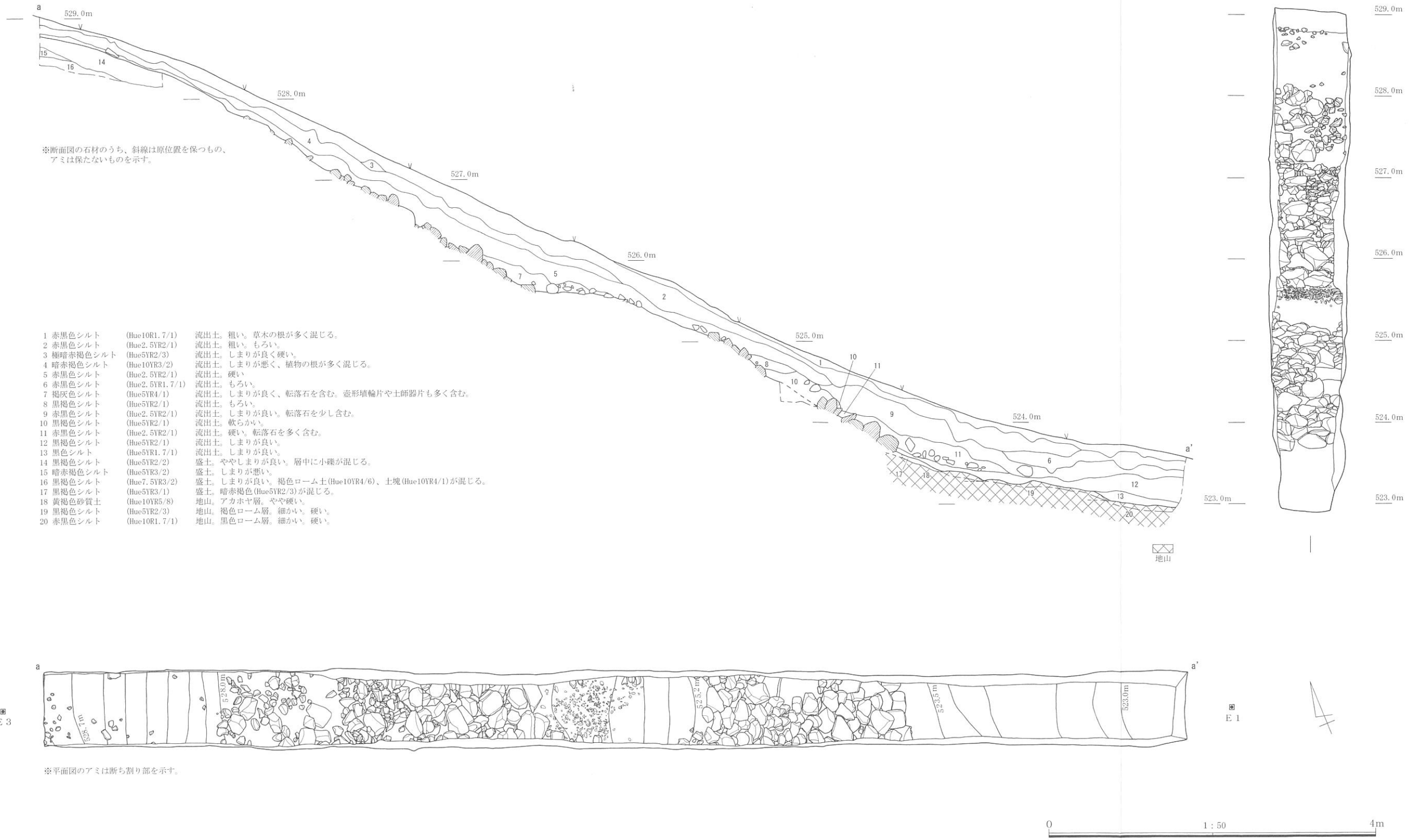
(1) 東1トレンチ (第18～22図、図版2～4)

墳丘東側の段築構造の解明のために設定したトレンチである。このトレンチは基準点となるE1とE3に沿って一昨年度のトレンチを墳頂側に拡張したものである。トレンチの大きさは幅1m、長さ14mで、上端は基準点E3より東に0.5mの位置にある。

今年度の調査成果は昨年度および一昨年度の調査成果とあわせて報告する。

調査成果 (第18図) 段築1段目基底石は基準点E1から西へ4mに位置する。基底石石材の長さは約25cm、その下端面の標高は523.7mである。1段目基底石の東側は約12°の傾斜で下っており、基準点E1より西に2m、標高523.3mの地点でその傾斜が大きくなる。したがって、1段目基底石から傾斜が変化する地点までを墳端平坦面であると認識した。その幅は基準点E1より西に4mから2mまでの約2mである。

墳端平坦面は地山のアカホヤ層(第18層)、ローム層(第19層)で構成され、このことから古墳築造当時にはアカホヤ層に達するまでの整地が行われたことがわかる。なお、墳端平坦面には礫は敷



第18図 東1トレンチ平面図・断面図・立面図

かれておらず、また周溝となるような掘り込みも確認されない。1 段目基底石直下の盛土（第 17 層）には、アカホヤ層上位の黒ボク土、アカホヤ、下位のローム土が混じる。

段築 1 段目基底石の西側は墳丘斜面となっている。葺石は約 31° の傾斜で上りながら基準点 E 1 より西へ 6.3 m、標高 525.0 m の地点まで良好に残存している。ただし、基準点 E 1 より西へ 7.1 m、標高約 525.5 m の地点から西側で傾斜が緩くなっている。このことから、その地点付近が段築 1 段目上端部であると推測できる。したがって、1 段目上端部から残存する葺石までの石材は転落したと考えられる。

段築 2 段目基底石は基準点 E 1 より西へ 8.5 m の位置にあり、その大きさは最大長約 40 cm、下端面の標高は 525.6 m である。2 段目基底石の東側には、1～11 cm 角の小礫が敷かれた段築テラス面が存在する。小礫の多くは 1～2 cm 角であり、それらの下には一回り大きい 3～4 cm 角の小礫があることも確認された。テラス面の標高は 525.5～525.6 m である。段築 1 段目上端部の石材が転落したと思われるためにテラス面の正確な幅は確認できないが、復元される 1 段目上端部の位置と原位置を留める小礫の状況から幅 1.4 m 程度であると推測される。なお、その傾斜は約 3° である。

段築 2 段目基底石の西側の墳丘斜面では、2 段目の葺石が約 31° の傾斜で相互にかみ合いながら良好に残存する。しかし、葺石は基準点 E 1 より 11 m 以西では所々欠落しており、さらに E 1 より 12.3 m 以西は残存しない。

トレンチ上端部の東側、基準点 E 1 より西へ 13.2 m、標高 528.6 m の地点以西では斜面傾斜が約 10° と大幅に小さくなっている。したがって傾斜が変化するその地点より西を墳頂平坦面と判断した。なお、トレンチ上端部では十数個の小礫が検出されており、段築テラス面同様に墳頂平坦面にも小礫が敷かれていたと推測される。さらに、今回の調査では墳頂平坦面における盛土の様相を確認するため基準点 E 1 より 13 m 以西のトレンチ北壁沿いの断ち割り調査を行った。この調査によって、墳頂平坦面以下 3 層分の盛土が確認された。このうち、第 16 層はシルト質の土で褐色ローム土を含んでおり、後述する墳頂トレンチで検出された盛土（東区第 7 層）に類似する。

遺物は壺形埴輪片と土師器片が出土したが、いずれも原位置を留めるものはなかった。

葺石構築技法（第 19～22 図） 今回の調査において葺石の積み方に特徴をみいだしたので、以下に報告する。

段築 1 段目では基底石の上に側面を垂直に揃えて大きな石材を 1 石積み重ね、それ以上の石材を斜面に沿って高さ 0.5 m 程度葺いていく。その段階で今度は大きな石材を水平になるように配置してわずかな平坦面を形成し、さらに上へは再び斜面に沿って石材を葺いていく。段築 1 段目において、この工程で形成されるわずかな平坦面は 3 箇所あると見られる。それぞれの地点は第 1 に基底石付近、第 2 に基準点 E 1 より西へ 5 m 地点、第 3 に段築 1 段目最上部（それぞれ、第 22 図中において A・B・C と表記する）である。その間隔は水平距離にして AB 間で 1 m、BC 間で 1.3 m である。B 地点より下部の斜面部では大きな石材、B 地点より上部の斜面部では主に小さな石材で構成される。C 地点より西側の石材構成については石材がほぼ残存していないため不明である。

段築 2 段目では、基底石とそれほど高さを変えずに石材を 1 石並べて平坦面（第 22 図 D 地点）を形成する。その後、石材によるわずかな平坦面（第 22 図 E・F・G 地点）を斜面の途中に設けながら、斜面に沿って斜めに石材を葺いていく。それぞれの地点間を 1 つの作業単位とすれば、その間隔は水平距離にして DE 間で 1.2 m、EF 間で 1.1 m、FG 間で 1.2 m である。段築 2 段目では基本的に小さな石材が多く使用され、所々大きな石材を組み合わせ用いている。また、E・F 地点前後では斜



第19図 段築1段目の葺石



第20図 段築テラス面の小礫



第21図 段築2段目の葺石

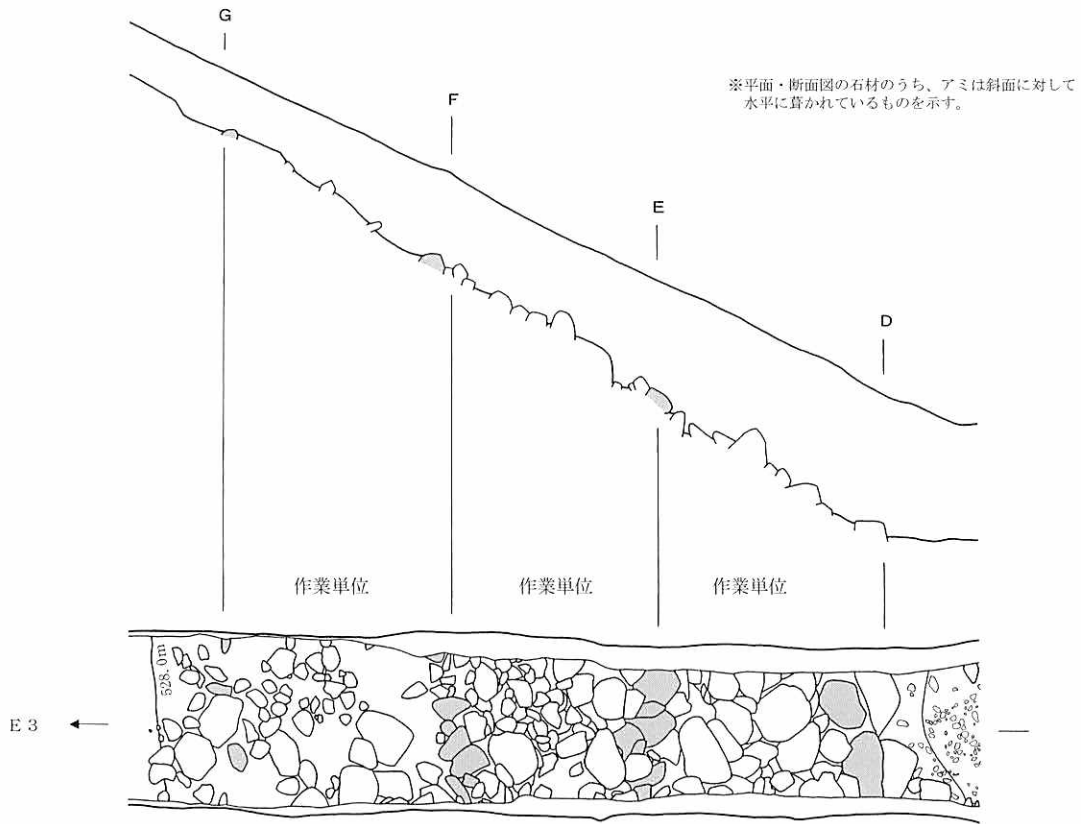
面の傾斜が緩くなった後に、大きな石材を用いて傾斜を急にする特徴が見受けられる。つまり、段築2段目は段築1段目と比べて、E・F地点のように傾斜の変換点が多く、これらが意図的なものと推測される。

以上のことから、段築1段目と2段目では葺石の積み方が異なっている。段築1段目におけるA・B・C地点には平坦面を形成する際に比較的に大きくかつ横長の扁平な石材が使用されている。このことから、A・B・C各地点での平坦面の形成は石材を斜面に葺いていく際の作業上の足場をつくる目的、ならびに石材の安定性を確保し葺石の崩落を防ぐ目的があると考えられる。段築2段目においても石材で平坦面を形成するという特徴では、崩落を防ぐという性格は共通している。しかしF・G地点では段築1段目・2段目のその他の地点と比べると相当に小さな石材が多く使用されている。このことからF・G地点での平坦面は作業上の足場の確保を目的としたものではないと思われる。また、後述するように6号墳において墳丘の東側は西側・北側よりも段築1段目基底石下端の標高が低いことが判明している。したがって使用する石材の規模と斜面への石材の葺き方の違いもあわせて考慮すると、段築2段目では大礫を用いて傾斜を急にすることで、墳頂平坦面におけるその標高差を解消する意図が見られる。そして、その大礫によって生じる隙間を小礫によって効果的に埋めることで葺石の安定性と作業の安定性を確保したのではないかと考えられる。(秦)

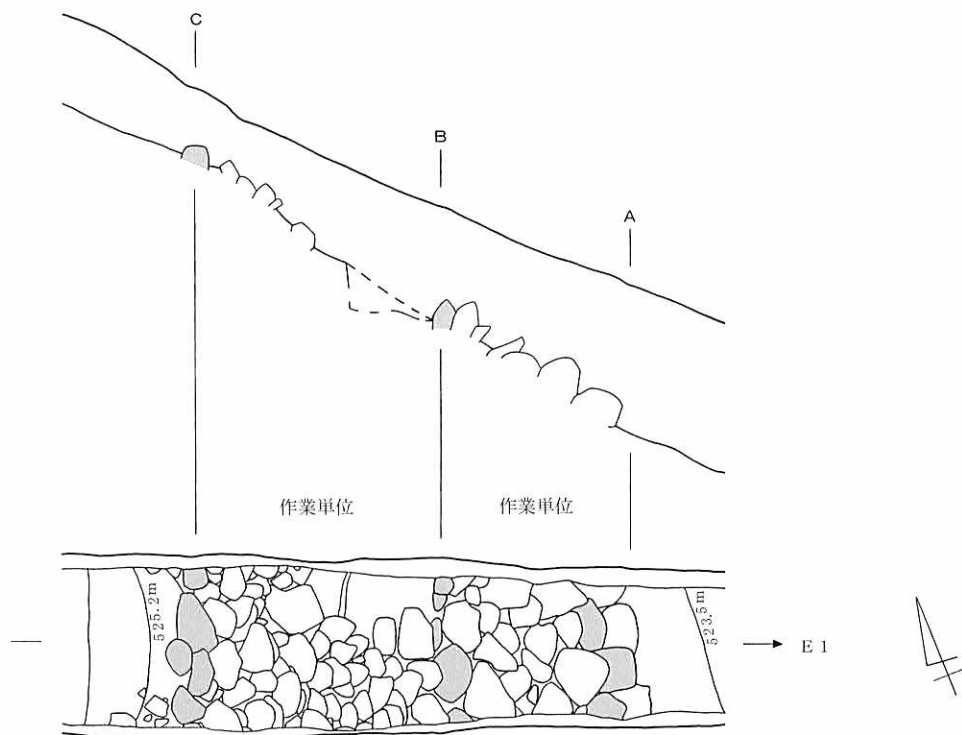
(2) 墳頂トレンチ (第23図、図版5・6)

埋葬施設および墳頂平坦面構造の解明のために設定したトレンチである。墳頂平坦面の長軸に沿わせ、調査以前から認められていた盗掘坑と思われる窪みにトレンチがかかるように設定した。トレンチ設定範囲の中央に樹木が生えていたためトレンチを二つに分け、西側を西区、東側を東区とした。トレンチの大きさは、西区が幅0.8m、長さ3mで、東区が幅0.8m、長さ3.4mである。

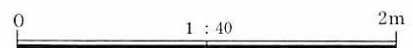
西区 まず西区の調査成果を報告する。表土等を0.3m程掘り下げたところで一面に小礫を敷いた層(第3層)を検出した。小礫面の標高は529.2～529.3mであり、ほぼ平坦である。東1トレンチの段築テラス面に敷かれている小礫よりは大きめの石材であるが、大きさにばらつきがあり直径1～16cmである。石材の多くは角の取れた河原石である。これらの小礫は人為的に墳頂部まで運ばれたものであると考えることが妥当であるため、小礫が敷かれている面を墳頂平坦面と判断した。



東1トレンチ段築2段目 平面・断面図



東1トレンチ段築1段目 平面・断面図



第 22 図 葺石の構築単位

その後トレンチの中軸から北半部の断ち割り調査を行い、第3層を含めて4種類の盛土を確認した。第3層はしまりの良い灰褐色シルト層であり、層中にも小礫を多く含む。第4層は非常にしまりが良く、明黄褐色の小さなローム土塊をまばらに含む黒褐色粘質土である。第5層は非常にしまりが良く、明黄褐色と褐色の大きなローム土塊を多く含む黒褐色粘質土である。第6層は非常にしまりが良く、明黄褐色のローム土塊を多く含む暗赤褐色粘質土である。第4・5・6層の上面はほぼ水平に整えられており、その上位に第3層が置かれている。

東区 つづいて東区の調査成果を報告する。東区は調査以前から認められていた盗掘坑と思われる窪みにトレンチ南壁がかかっていたため、窪み部分の地表面の標高は周囲よりも0.1mほど低くなっている。表土等を0.3～0.4m程掘り下げたところで西区の墳丘面と同様の灰褐色シルト層(第5層)を検出した。小礫はほとんど流失しており、西区と比較して残存状態がきわめて悪い(図版5-1)。

その後トレンチの全面掘り下げを行ったところ、トレンチ北壁断面において第5層を含めて4種類の盛土を確認した。第5層はしまりの良い灰褐色シルト層であり、層中に多くの小礫を含む。第6層は非常にしまりが良く、明黄褐色の小さなローム土塊をまばらに含む黒褐色粘質土である。第7層は第6層と同じ土質をもつが、明黄褐色と褐色のローム土塊をより多く含む黒褐色粘質土である。第8層は非常にしまりが良く、明黄褐色と褐色のローム土塊を多く含む明赤褐色粘質土である。東区5・6層は西区3・4層と同じ様相を示す。

一方トレンチ南壁断面においては盛土を大きくえぐるような掘り込みラインを確認することができた。掘り込みラインは墳丘面(第5層)下0.2mまでを内側に大きくえぐり、そこから傾斜を変え下に掘り込まれている。さらにトレンチ平面においても掘り込みラインを検出した(第23図)。平面の掘り込みラインは西壁から1.5mの所までほぼ直線的に伸びている。南壁断面の掘り込みライン内部には2種類の土層が存在する(第3・4層)。第3層はしまりが悪く草木の根を多く含む黒褐色シルト層である。第4層はしまりが悪く、明黄褐色と褐色の大きなローム土塊と小礫を多く含む赤黒色シルト層である。なお、後述するようにこの掘り込みラインは後世の盗掘坑ラインと判断した。

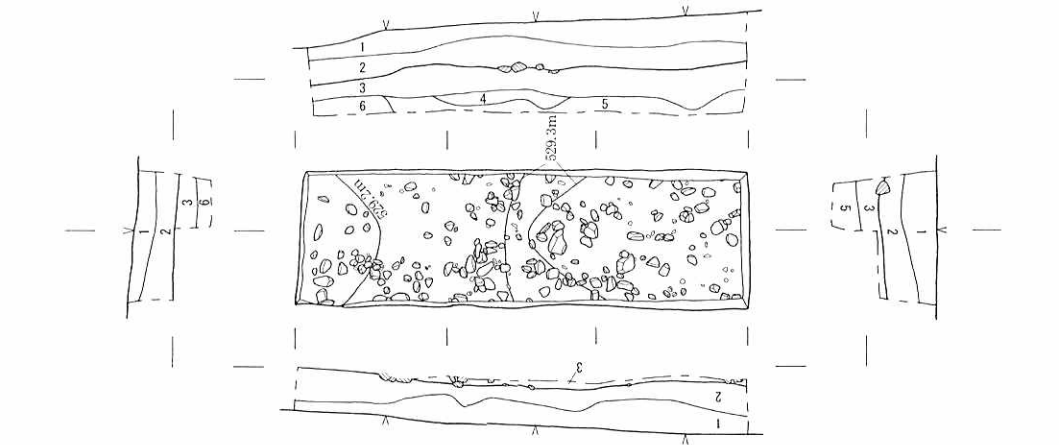
なお、遺物は両区あわせて壺形埴輪片2点と土師器片4点が出土した。いずれも小礫直上や墳丘面上では出土していないため、原位置を留めていないと考えられる。(宮崎)

4. 小結

(1) 墳丘形態の復元(第24図、第17表)

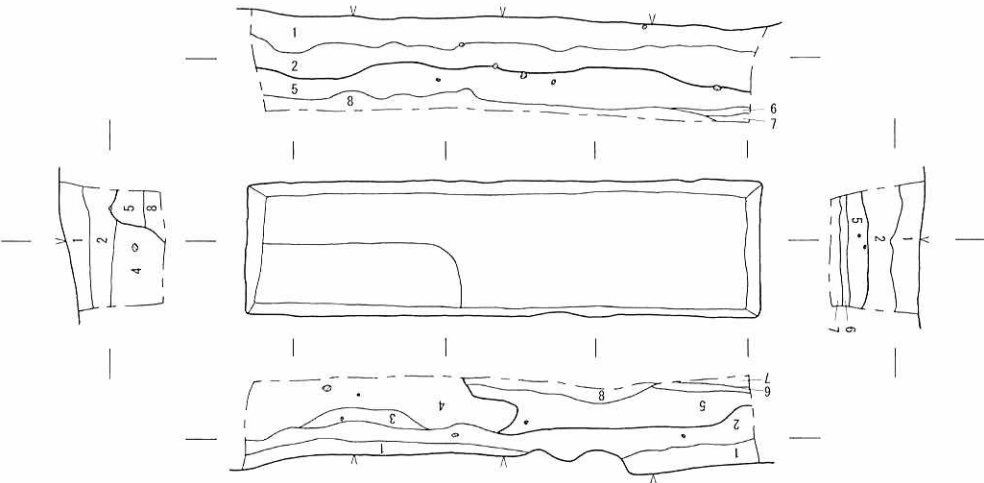
6号墳は後世の削平をほとんど受けることなく、ほぼ築造時の状態を保っている古墳である。一昨年度の第3次調査と昨年度の第4次調査、今年度の第5次調査を通して、墳丘の東西南北4方向、墳頂部にそれぞれトレンチを設定した。東西南北4トレンチのいずれにおいても段築1段目の葺石が確認されている。また、墳端平坦面は東1・北1・南1トレンチでは全体が、西1トレンチではその一部が検出されている。東1・北1・西1トレンチでは、段築2段目の葺石と段築テラスおよび墳頂平坦面も確認された。墳頂部では設定した西区・東区のトレンチから礫が敷かれた墳頂平坦面や盛土の状況も明らかになった。ここでは、これまでの調査成果をもとに墳丘形態の復元を行う。

段築 墳端平坦面の全体は、西1トレンチを除く3つのトレンチで確認されている。東1・南1トレンチで標高523.3m、北1トレンチで標高524.0mの位置に傾斜変化点があり、その位置までが墳端平坦面の範囲であると思われる。墳端平坦面は、段築1段目基底石から傾斜変化点までの1.9～2.0mの幅で、墳丘の外側をめぐるように推測される。



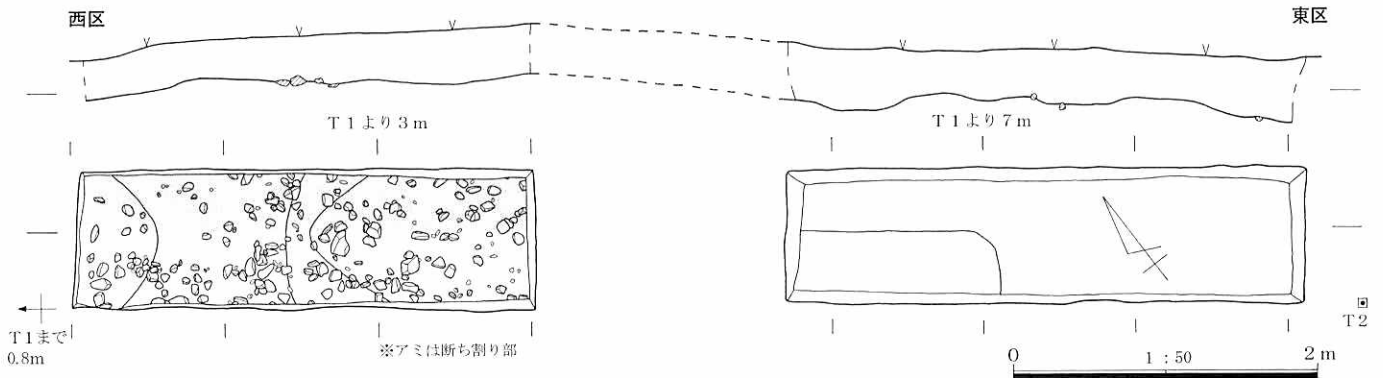
西区

- | | |
|------------------------|---|
| 1 暗赤灰色シルト (Hue7.5R3/2) | 表土。粗い。しまりが悪い。草木の根を多く含む。 |
| 2 暗赤灰色シルト (Hue10R4/1) | 流出土。細かい。しまりが悪い。草木の根を多く含む。小礫をまばらに含む。 |
| 3 灰褐色シルト (Hue5YR4/2) | 盛土。細かい。しまりが良い。小礫を多く含む。 |
| 4 黒褐色粘質土 (Hue7.5R2/2) | 盛土。細かい。非常にしまりが良い。明黄褐色 (Hue10YR6/8) のロームをわずかに含む。 |
| 5 黒褐色粘質土 (Hue10YR3/2) | 盛土。細かい。非常にしまりが良い。明黄褐色 (Hue10YR6/8) と褐色 (Hue7.5YR4/4) のロームを含む。小礫をまばらに含む。 |
| 6 暗赤褐色粘質土 (Hue10R2/2) | 盛土。細かい。しまりが良い。明黄褐色 (Hue10YR6/8) のロームを含む。 |



東区

- | | |
|------------------------|--|
| 1 暗赤灰色シルト (Hue7.5R3/2) | 表土。粗い。しまりが悪い。草木の根を多く含む。 |
| 2 暗赤灰色シルト (Hue10R4/1) | 流出土。細かい。しまりが悪い。草木の根を多く含む。小礫をまばらに含む。 |
| 3 黒褐色シルト (Hue5YR2/2) | 掘り込み部の埋土。粗い。しまりが悪い。草木の根を多く含む。小礫をまばらに含む。 |
| 4 赤褐色シルト (Hue10R2/1) | 掘り込み部の埋土。細かい。しまりが悪い。暗黄褐色 (Hue10YR6/8) と褐色 (Hue7.5YR4/4) のロームを含む。小礫を多く含む。 |
| 5 灰褐色シルト (Hue5YR4/2) | 盛土。細かい。しまりが良い。小礫を多く含む。 |
| 6 黒褐色粘質土 (Hue7.5R2/2) | 盛土。細かい。非常にしまりが良い。明黄褐色 (Hue10YR6/8) のロームを多く含む。 |
| 7 黒褐色粘質土 (Hue5YR2/2) | 盛土。細かい。非常にしまりが良い。明黄褐色 (Hue7.5YR4/4) と褐色 (Hue7.5YR4/4) のロームを含む。 |
| 8 明赤褐色粘質土 (Hue5YR3/3) | 盛土。細かい。非常にしまりが良い。明黄褐色 (Hue10YR6/8) と褐色 (Hue7.5YR4/4) のロームを含む。 |



第 23 図 墳頂トレンチ平面図・断面図 (下は西区・東区関係図)

段築1段目の葺石は全てのトレンチで検出されている。残存している石材は相互にかみあうように敷き詰められているが、狭い調査範囲のため縦方向に目地の通るような様子は確認されなかった。しかし、前節で述べたように東1トレンチでは、平坦面を形成する石材の配置が横方向に伸びる様子を複数箇所確認している。そして、それらの石材の間を埋めるように斜面に沿って石材が葺かれているため、これらが横方向の目地と考えられる。基底石には長さ20～40cmの比較的大きな石材を用いている。段築1段目基底石下端面について、東1・南1トレンチでは標高が523.7m、北1トレンチでは524.5m、西1トレンチでは525.5mである。墳丘の西側と東側・南側とでは墳端の標高に1.8mの差があり、墳端が同じレベルではめぐっていない。

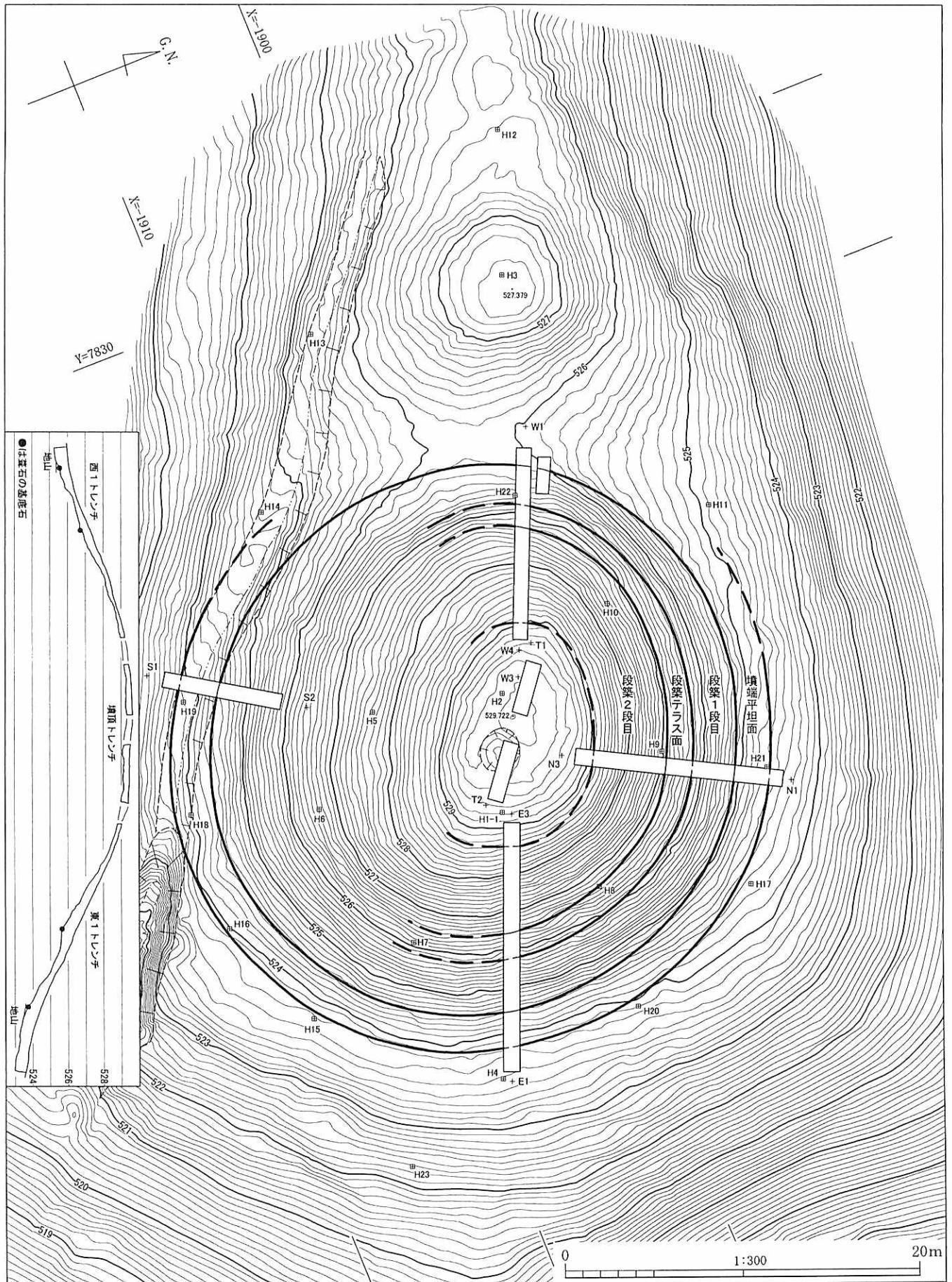
段築テラス面は、東1・北1・西1トレンチで確認されている。段築テラス面には小礫が敷かれており、東1トレンチでは1～2cm大の小礫が多く、それらの下に3～4cm大の小礫が敷かれている様子も確認された。北1トレンチでは1～10cm大の小礫が敷かれている。確認された小礫の残存状況および復元される段築1段目葺石と段築テラス面の接点位置から、幅は東1トレンチで1.4m、北1トレンチで1.5mであると推測される。西1トレンチの段築テラス面にも同じく小礫が敷かれているものの、それは5～10cm大の大きさであり、他のトレンチの小礫と比較すると相当に大きい。段築テラス面の標高は東1トレンチで525.5～525.6m、北1トレンチで526.0～526.2m、西1トレンチで526.6～526.7mであり、東1トレンチと北1トレンチの標高差は約0.5m、西1トレンチとは約1mにおさえられている。

段築2段目の葺石は、東1・北1・西1トレンチで確認されている。段築1段目と同様に石材が相互にかみあうように敷き詰められている。東1および西1トレンチでは大小の石材が組み合わせられて使用されているのに対して、北1トレンチでは上部にある石材ほど大きい傾向が見られる。2段目基底石下端面について、東1トレンチでは標高が525.6m、北1トレンチでは526.2m、西1トレンチでは526.7mである。東1・北1・西1の各トレンチで比較すると、墳端では標高差が最大1.8mであるのに対して、2段目基底石下端の標高差は最大1.1mと小さくなっている。各トレンチでの墳端の標高差は大きいですが、段築テラス面や段築2段目の基底石下端面での標高を比較すると、その標高差を解消するような意図が見受けられる。段築テラス面や段築2段目の基底石の位置、現在の地形から段築2段目は楕円形であることが推測される。

墳頂平坦面は東1・北1・西1トレンチで確認され、東1トレンチでは標高528.6m、北1トレンチでは528.7m、西1トレンチでは528.8mの位置から墳頂平坦面がはじまると推測される。東1・北1・西1トレンチで確認されたこれらの標高から、墳頂平坦面は標高差をなくすようにつくられたと考えられる。墳頂部では墳頂トレンチの西区および東区の調査によって墳丘構築後に墳頂面にも小礫が敷かれていたことは明らかであり、さらに西区で小礫が多く残存するのに対して東区では小礫が

第17表 6号墳墳丘各トレンチの計測値

		東1トレンチ	北1トレンチ	西1トレンチ	南1トレンチ
段築2段目	墳頂平坦面との境界(推定)の標高	528.6m	528.7m	528.8m	—
	基底石下端面の標高	525.6m	526.2m	526.7m	—
テラス面	幅	1.4m	1.5m程度	—	—
段築1段目	残存葺石上端の標高	525.5m	526.0m	—	—
	基底石下端面の標高	523.7m	524.5m	525.5m	523.7m
墳端平坦面	幅	2m	1.9m	—	2m
	外郭線の標高	523.3m	524.0m	—	523.3m



第24図 6号墳墳丘形態復元図

多く流出している。これに関連して、東1・北1トレンチの上端部では小礫が確認されていることから、これらは墳頂の小礫が流出したものと考えることが妥当である。

墳丘構築 墳頂の成形技法には、東1・北1・西1トレンチと南1トレンチのあいだで違いが見られた。東1・北1トレンチではアカホヤ層、西1トレンチではローム層まで整地を行っており、いずれにおいても地山を削りだして古墳の土台とする地山成形が採用されている。そして、地山面をそのまま墳頂平坦面としている。一方、南1トレンチではアカホヤ層までの整地後、薄い盛土によって墳頂平坦面を成形している。墳頂平坦面の成形方法に違いが生じた要因として、古墳築造以前の旧地形の形状が関係していることが考えられる。南1トレンチでは盛土による墳頂平坦面の成形を行って初めてその標高が東1トレンチの墳頂平坦面の標高と同じになることから、墳丘の南側の旧地形はもともと標高が低かったことがうかがえる。そのように考えると、旧地形は築造以前には南北幅が短かったことが推測され、設計通りの大きさの古墳を構築するためにはその短い南北幅を盛土によって少し広げたと推測される。

葺石石材 葺石として使用される石材はほぼ角閃石安山岩であり、少量の輝石安山岩を含む。ごく少量ながら流紋岩や溶結凝灰岩も認められる。これらの石材は墳丘北側の谷部の沢で手に入れることができる。使用石材の色調は白色が多く、意図的に白色石材を選択していたことが推測される。

墳形と規模 現状の地形測量図と第3～5次調査の成果から、6号墳は2段築成の円墳で、その直径は東西約31m、南北約30mと推定される。直径の復元については、各トレンチの段築1段目基底石の位置を根拠とする。また、墳頂平坦面を含めた直径は、北1・南1トレンチの傾斜変化点の位置から南北で約34mと推定されるが、西1トレンチの墳頂平坦面の正確な幅が復元できないため東西の直径は定かではない。6号墳の西側には7号墳が近接して築造されているため、あるいは7号墳と墳頂平坦面を共有しているとも考えられる。墳頂礫敷面の標高が529.2～529.3mであることから、第17表における各トレンチの段築1段目基底石下端面の標高と比較すると、築造当時の高さは3.7～5.6mである。また、東1・北1・西1トレンチで墳頂平坦面の端部が検出されていることから、墳頂平坦面の東西の直径は12.6mとなる。南北の直径については南側の端部が不明であるものの9m程度と推測され、墳頂平坦面も楕円形に広がっていたと考えられる。 (秦)

(2) 墳頂部の状況について (第23図)

墳頂部上層の構造は、種類の異なる非常にしまりの良い粘質土を重ね合わせ、その上部にしまりの良い灰褐色シルト(西区第3層・東区第5層)の盛土を一面に盛っている。この墳頂面最上層の盛土は下位の盛土と異なり、灰褐色を呈し平坦面一面に盛られ、さらにその上に小礫が敷かれていることから化粧土の可能性もある。墳頂面の標高は西区北壁東端で529.330m、東区北壁西端で529.140mであり、標高差が小さい。

東区においては、断面・平面ともに掘り込みラインが確認された。掘り込みラインはトレンチ平面において西壁から1.5mのところまでほぼ直線的に伸びていることから墓壙ラインの可能性も考えられた。しかし、掘り込みライン内部の埋土のしまりが悪いこと、墳丘盛土を大きくえぐるように掘られていること、墳頂面に見られる落ち込みに対応することの3点から掘り込みラインは盗掘坑ラインであると判断することが妥当である。東区の墳頂面には小礫がほとんど残っていなかったことから、墳頂面の小礫を流出させるような攪乱が起こった後に盗掘が行われたと判断できる。

なお、西区においても墓壙ラインと見られるようなものは確認できなかった。今年度の調査では調査範囲が狭かったことなどから、埋葬施設の様相を把握するには至らなかった。 (宮崎)

七 遺 物

1. 1号墳出土遺物 (図版 7)

これまで正式に報告がなされていなかった 1 号墳出土の鉄剣と豎櫛について以下に報告する。これらは現在、熊本県教育委員会が所蔵している。

(1) 鉄剣 (第 25 図)

鉄剣が 1 点出土している。木質部を含めた全体の残存長は 19.5 cm であり、鉄剣の身部は 14.4 cm、茎部は 4.9 cm と小振りである。

身に鑄は確認できず、関は浅い直角関である。把頭の欠損部から丸みを帯びた茎尻がわずかに確認でき、茎は茎尻に向かってゆるやかに幅を狭め、栗尻に収められていると推測される。茎部に糸巻の痕跡、目釘穴は共に確認できなかった。

鞘と把は残存しているが、鞘はその木質部が部分的に身に付着しているのみである。把は把縁においてわずかに本来の面を確認できる。把縁は関付近にあり、身部までは及ばない合口式である。また、その上端は直線的であり、把間に向かいゆるやかに盛り上がる部分をもつ。把間から把頭にかけて本来の面は確認できなかった。

(入江)

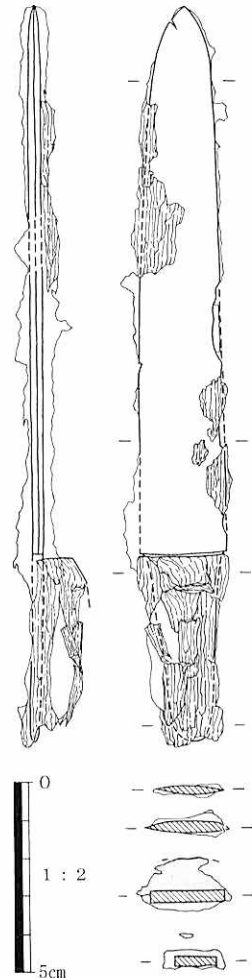
(2) 豎櫛 (第 26 図)

豎櫛が 1 点出土している。湾曲結歯式の豎櫛である。残存しているのはムネ部の表面に塗布された黒漆膜のみであり、櫛歯部は残っていない。

ムネ部の漆膜には朱と思われるものが付着している。漆膜に残った糸の痕跡において、ほとんど撚りが確認できないことから、櫛歯を結束する糸には絹糸が用いられたと推測される。ムネ部の外周はすべて欠損しているが、その残存状態を見ると本来の外形に近い部分まで残存していると考えられる。寸法については正確な数値を出すことができないが、残存するムネ部は縦 2.4 cm、幅 2.2 cm、厚さは 0.3 cm である。

櫛歯にはコーナー部分を面取りした断面長方形の木材が使用されており、その数は 12 本以上と推測される。

(松本)



第 25 図 1 号墳出土鉄剣実測図 (アミは木質部)

2. 3号墳採集遺物 (図版 8-1・2)

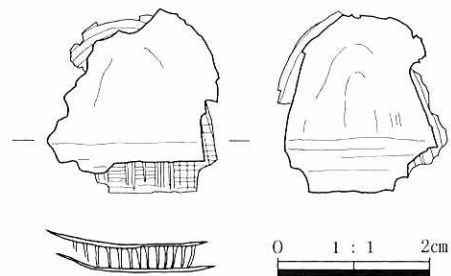
3 号墳の墳丘南西斜面から埴輪片 2 点、土師器片 1 点、須恵器片 3 点を採集した。

(1) 埴輪 (図版 8-2)

図版 8-2 に示したものである。厚さは 5 が 8.5 mm、6 が 7.0 mm で、調整は 5・6 共に内外面にナデが施される。

(2) 土師器 (第 27 図-1、第 18 表)

高坏の坏部片である。調整は、内外面共にナデが施されている。段部外面には部分的にミガキも施され、これによ



第 26 図 1 号墳出土豎櫛実測図

第 18 表 3号墳採集遺物一覧表

No.	種類	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点
				口径	底径	器高					
1	土師器	高坏	坏部	—	—	—	外：ヨコナデ・ミガキ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄褐 内：にぶい褐	良好	復元段部径は 15.4cm。	墳丘 南西斜面
2	須恵器	甕	胴部	—	—	—	外：平行タタキ・ナデ 内：同心円文当て具痕・ナデ	外：黄灰 内：暗灰黄	良好	外面に緑がかった自然釉がごく部分的に付着。内面に黒色吹き出し。	墳丘 南西斜面
3	須恵器	甕	胴部	—	—	—	外：平行タタキ・ナデ 内：同心円文当て具痕・ナデ	外：黄灰 内：褐灰	良好	外面に緑がかった自然釉が付着。内面に黒色吹き出し。	墳丘 南西斜面
4	須恵器	甕	胴部	—	—	—	外：平行タタキ・ナデ 内：同心円文当て具痕・ナデ	外：灰 内：黄灰	良好	内面に黒色吹き出し。	墳丘 南西斜面

※ () は復元径。黒斑は残存部に確認できるもののみ記述。

り稜がやや不明瞭となる。段部における復元径は 15.4 cm である。

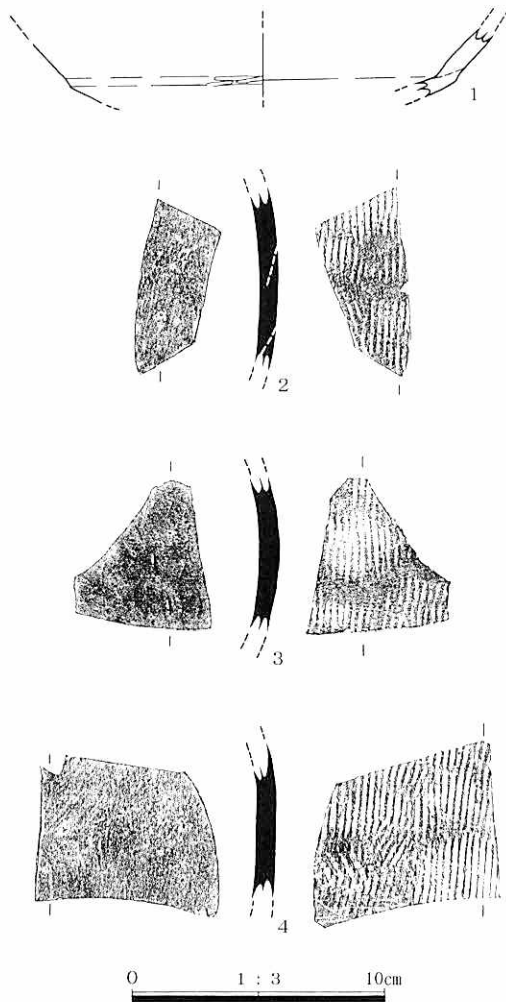
(3) 須恵器 (第 27 図-2~4、第 18 表)

全て甕の胴部片と考えられる。調整を見ると、外面には平行タタキ後部分的にナデが施され、内面は同心円文当て具痕をナデ消しているが、当て具の痕跡がうっすらと見受けられる。さらに内面には黒色吹き出しがある。胎土は緻密で、焼成は非常に良好である。

2・3の外面に施されている平行タタキの筋は整っておらず、ややいびつである。また、外面には緑がかった自然釉が付着しており、内面には黒色吹き出しが多く見られる。以上の共通点が見られることより、2・3は同一個体の可能性がある。

4は2・3と近似しているが、4の外面に見られるタタキの筋は真っ直ぐに整う。断面を見ると、焼きムラにより断面の両端と中央部の色が異なる。これは2・3には見られなかった特徴である。また、内面に黒色吹き出しが見られるが、その量は2・3に比べて少ない。これらの特徴から4は別個体の可能性が高い。

以上、採集した3点の須恵器片は、甕2個体分である可能性が考えられる。(豊永)



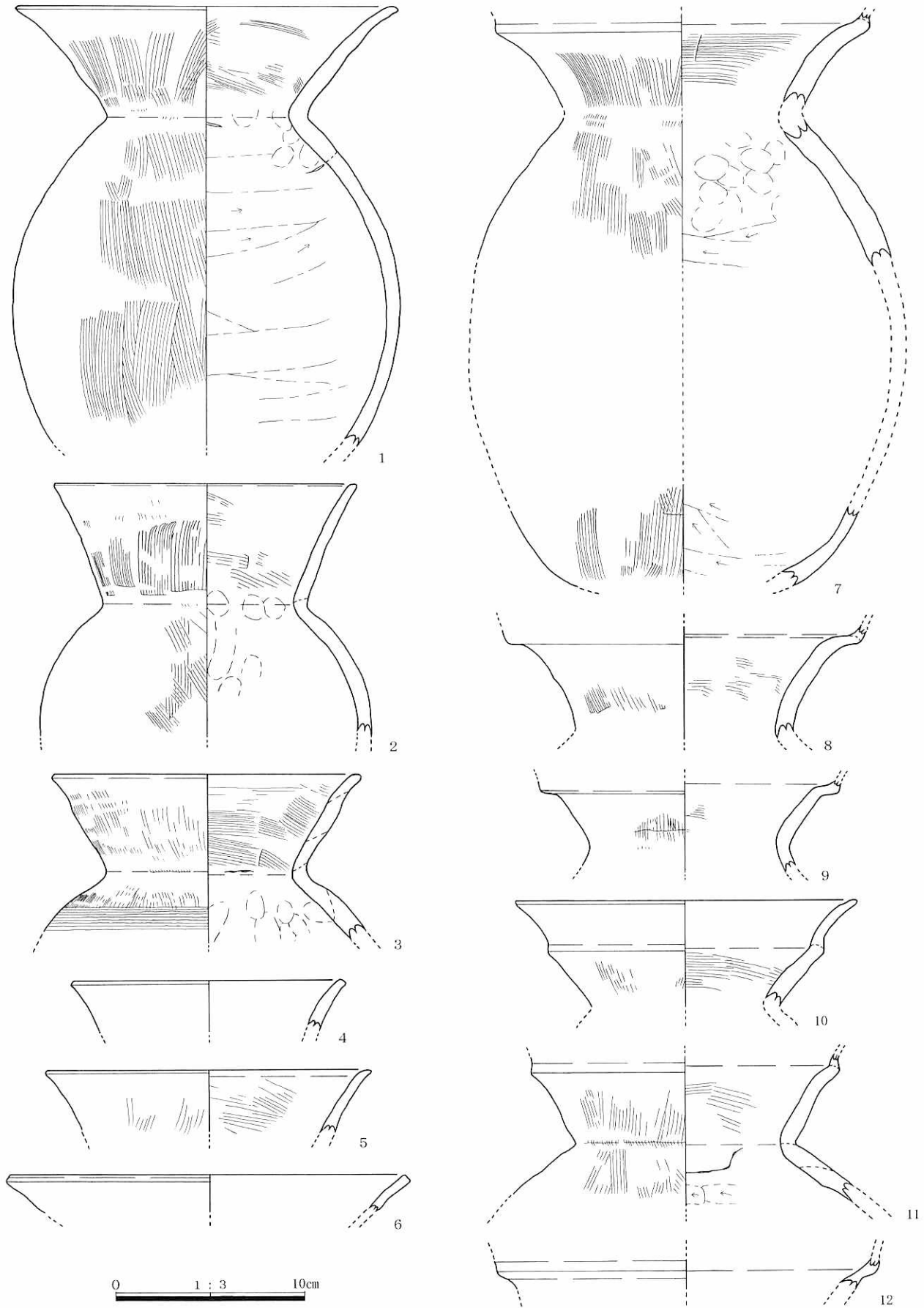
第 27 図 3号墳採集土師器・須恵器実測図

3. 6号墳出土遺物 (図版8-3、9・10)

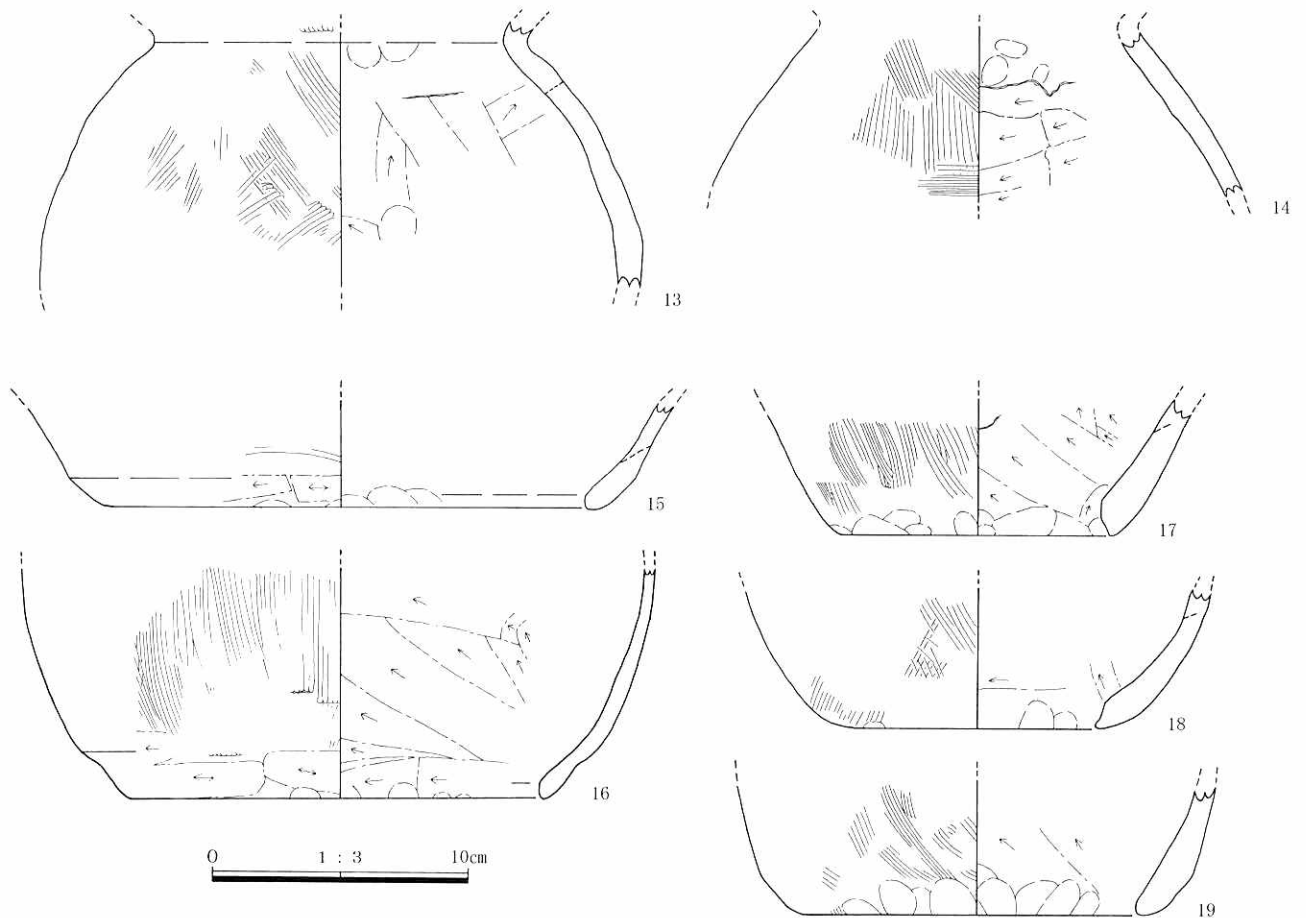
今年度、6号墳では、東1トレンチから壺形埴輪片が124点、土師器片が9点、墳頂トレンチからは壺形埴輪片が2点、土師器片が4点出土した。東1トレンチの壺形埴輪片は段築テラス面での出土が目立った。また墳頂トレンチから壺形埴輪片が出土したことにより、墳頂部に壺形埴輪が樹立していた可能性が考えられる。しかし、原位置を留める個体がなかったため樹立位置は不明である。

(1) 壺形埴輪 (第3~5次調査出土) (第28・29図、第19表)

今年度の調査では、壺形埴輪片が130点(東1トレンチ124点、墳頂トレンチ2点、採集4点)出土した。2012・2013年度調査のものも加えると計768点を数える。今年度出土したものもすべて破片であり、全体を復元できる個体は存在しなかった。以下、今年度出土の壺形埴輪に加え、2012・



第 28 图 6号墳出土壺形埴輪実測図 (1)



第 29 図 6号墳出土壺形埴輪実測図(2)

2013年度出土のものについてもあわせて報告する。

単口縁 (1～6) 口縁部から底部までが接合できる個体は確認されていない。その形状から口縁部は外湾気味に大きく開くタイプ(1)と外傾しながら直線的に開くタイプ(2～6)に分けられ、いずれも端部に面をもつ。中でも1は残存状態がよく、胴部の下半部までを確認できた。これの胴部最大径は20.6cm、残存長は約28.0cmである。胴部は長胴と考えられる。頸部の稜は不明瞭で肩はあまり張らない。調整は、多くの個体の外面にはタテハケ・ナナメハケ・ヨコハケが施されている。3においては、肩部に装飾的なヨコハケが施される。内面にはヨコハケ・ナナメハケの後、ヨコナデが施される。頸部付近にはユビオサエが集中して見られ、ナデも施されている。1の胴部には横方向のケズリも施され、器壁が薄く調整されている。赤みがかった破片があるが、赤色顔料が塗布されたものであるかどうかはわからない。また、1は外面に黒斑を有する。

6は今年度出土し、図化した個体である。口縁部は外傾しながら直線的に伸び、他の個体よりも大きく開く。器壁は薄く、一部強くナデが施されたことによりへこみが生じている。内外面共にヨコナデが施されている。赤色顔料の塗布や黒斑は確認できなかった。復元口径は21.0cmである。

二重口縁 (7～12) 単口縁のものと同様に全形をうかがえる個体は出土していない。いずれも第一口縁部に第二口縁部をそのまま載せたような形を呈する。さらにこれらは、第一口縁部付近で外湾するタイプ(7～9)と直線的に開くタイプ(10～12)とに分けられる。どの個体も第一口縁部と第二口縁部の境は比較的明瞭である。10を見ると、第二口縁部はあまり長く続かず、内外面共にヨコナデのみが施されることがわかる。6号墳の二重口縁を持つ個体の中でも特に残存状態の良いもの

第 19 表 6号墳出土壺形埴輪一覧表

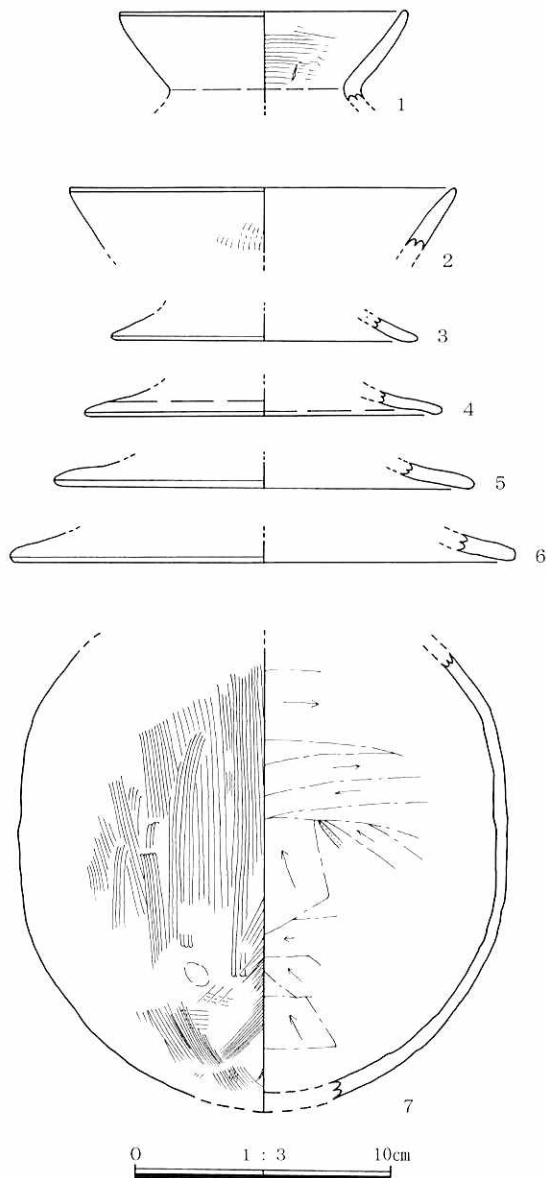
No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点	第 49 集掲載 No.
			口径	底径	器高						
1	壺形埴輪	口縁部～胴部	(20.4)	—	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ヨコナデ・ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙	良好 黒斑あり	胴部は長胴と推測。復元胴部最大径は 20.6 cm。残存長は 28.0 cm。単口縁。	北 1 トレンチ	5
2	壺形埴輪	口縁部～肩部	16.1	—	—	外：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ヨコナデ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄褐色 内：黄褐色	良好	復元胴部最大径は 17.4 cm。単口縁。	北 1 トレンチ	4
3	壺形埴輪	口縁部～肩部	16.5	—	—	外：タテハケ・ヨコハケ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ヨコナデ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	肩部に装飾的なヨコハケが一周めぐる。単口縁。	西 1 トレンチ	3
4	壺形埴輪	口縁部	(14.6)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	単口縁。	西 1 トレンチ	1
5	壺形埴輪	口縁部	(17.4)	—	—	外：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ナナメハケ・ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：橙	良好	単口縁。	南 1 トレンチ	2
6	壺形埴輪	口縁部～頸部	(21.0)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：橙 内：橙	良好	単口縁。	墳頂 トレンチ	2014 年出土
7	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：橙 内：にぶい橙	良好	復元有段部径は 20.2 cm。二重口縁。	北 1 トレンチ	10
	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ナデ・ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元頸部径は 13.0 cm。	北 1 トレンチ	10
	壺形埴輪	胴部～底部付近	—	—	—	外：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好		北 1 トレンチ	10
8	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：橙 内：にぶい橙	良好	復元有段部径は 19.4 cm。二重口縁。	東 1 トレンチ	9
9	壺形埴輪	有段部～第一口縁部	—	—	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙	やや不良	復元有段部径は 16.8 cm	東 1 トレンチ	2014 年出土
10	壺形埴輪	第二口縁部～頸部	(18.2)	—	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元第二口縁部径は 18.2 cm、有段部径は 14.8 cm である。二重口縁。	西 1 トレンチ	7
11	壺形埴輪	有段部～胴部	—	—	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ・ヨコナデ・ケズリ	外：浅黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元有段部径は 16.6 cm、頸部径は 12.0 cm。二重口縁。	西 1 トレンチ	8
12	壺形埴輪	有段部	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい橙 内：にぶい橙	良好	復元有段部径は 20.6 cm。	東 1 トレンチ	2014 年出土
13	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい橙 内：浅黄褐色	良好	復元頸部径は 14.6 cm、胴部最大径は 23.0 cm。	北 1 トレンチ	12
14	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：ナナメハケ・タテハケ・ヨコハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい橙 内：黄褐色	良好 黒斑あり	明瞭なヨコハケを肩部にもつ。復元頸部径は 12.6 cm、胴部最大径は 23.8 cm。	東 1 トレンチ	11
15	壺形埴輪	底部	—	(19.4)	—	外：ケズリ・ナデ・ユビオサエ 内：ナデ・ユビオサエ	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	やや不良	最終段階にて底部を削って整形、後にユビオサエ整形。工具によるヨコナデ。	東 1 トレンチ	2014 年出土
16	壺形埴輪	底部	—	(16.4)	—	外：タテハケ・ケズリ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや不良	過去の報告分を底部と傾きを修正して再度図化。	北 1 トレンチ	16
17	壺形埴輪	底部	—	(10.8)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：浅黄褐色 内：黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階にて底部をユビオサエ整形。	西 1 トレンチ	14
18	壺形埴輪	底部	—	(9.7)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい橙 内：浅黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階にて底部をユビオサエ整形。	西 1 トレンチ	15
19	壺形埴輪	底部	—	(12.8)	—	外：タテハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：明黄褐色 内：浅黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階にて底部をユビオサエ整形。	西 1 トレンチ	13

※ () は復元径。黒斑は残存部に確認できるもののみ記述。

として7があり、これは2013年度に北1トレンチ段築2段目基底石付近より、破片がまとまって出土した個体である。色調・胎土が類似することから、同一個体として復元した。口縁部は有段部から頸部にかけて残存している。調整は、外面の頸部にタテハケ・ナナメハケ後有段部周辺にヨコナデが施されている。内面は頸部にヨコハケ後ヨコナデが施されている。有段部における復元径は20.2 cm、頸部径は13.0 cmである。胴部を見ると、肩はあまり張らない。調整は、外面にはタテハケ・ヨコナデ後頸部付近にヨコナデが施されている。内面には頸部と胴部付近にユビオサエ後ユビナデが施されており、ケズリも見られる。底部は端部が残存しておらず、後述するケズリにより整形されるタイプ・ユビオサエにより整形されるタイプのどちらに対応するかは判明していない。調整は、外面にタテハケ・ナナメハケ後底部付近にヨコナデが施される。内面にはケズリが施される。二重口縁壺形埴輪全体に共通する調整は、内外面共に単口縁のものと同様であるが、二重口縁のものの方が、頸部付近にユビオサエが見られる個体は少ない。赤色顔料の塗布や黒斑は確認できなかった。

9・12は今年度出土し、図化した個体である。9は頸部から第一口縁部までが残存している。頸部は第一口縁部付近で外湾する。外面にはタテハケ後ヨコナデ、内面にはヨコハケ後ヨコナデが施される。有段部における復元径は16.8 cmである。赤色顔料の塗布や黒斑は確認できなかった。

12は有段部片である。調整は内外面共にヨコナデが施されている。有段部における復元径は20.6



第30図 6号墳出土土師器実測図

(2) 土師器 (第3～5次調査出土) (第30図、第20表)

今年度の調査では、土師器片が13点(東1トレンチ9点、墳頂トレンチ4点)出土した。2012・2013年度出土のものも加えると計73点を数える。今年度出土のものも全て破片で全形はうかがえず、原位置を留めるものも存在しなかった。以下、今年度出土の土師器に加え、2012・2013年度出土のものについても報告する。

小型丸底壺 (1) 1は口縁部から頸部にかけて残存している。端部は面をもたず、丸く収める。調整は外面にヨコナデが、内面にはヨコハケ後部分的にナデが施されている。口縁部は緩く内湾しながら開くように伸びる。復元口径は11.3cmである。

高坏 (2～6) 3～6は脚裾部であり、いずれも林田和人氏の分類(林田2002)によると脚柱部と脚裾部の境界が明瞭なタイプ(高坏A)であり、脚部がハの字状に広がるタイプ(高坏B)は確認されていない。調整は、内外面にナデが施されている。

2・5・6は今年度出土し図化した個体である。2は坏部片である。端部は面をもたず、丸く収め

cmである。赤色顔料や黒斑は確認できなかった。

胴部 (13・14) 単口縁・二重口縁のどちらに対応するかは、13・14いずれも判別できない。胴部には、あまり肩の張らないタイプ(1・14)とやや肩の張るタイプ(2・3・11・13)が存在する。調整は、外面にはタテハケ・ヨコハケ・ナナメハケが施され、内面にはユビオサエ・ケズリが施される。赤色顔料が塗布された個体があり(図版10-2右)、14には黒斑が見られた。

底部 (15～19) 単口縁・二重口縁のどちらに対応するかは、どの底部も不明である。底部はすべて、粘土紐積み上げにより成形されている。底部は整形方法により、ケズリにより整形されるタイプ(15・16)とユビオサエにより整形されるタイプ(17～19)とに分けられる。調整は、外面にはタテハケ・ナナメハケ・ケズリ・ユビオサエが、内面にはケズリ・ユビオサエが施されている。赤色顔料が塗布された個体は確認できず、17・18・19には黒斑が確認された。

15は今年度出土し、図化した個体である。底部の外面にはケズリが施され、その後ユビオサエが行われている。内外面のユビオサエの位置が対応しているため、端部は指でつまんで整形されたと考えられる。同様の、ケズリにより整形されるタイプである16と比較すると、器壁はやや厚めとなる。復元底径は19.4cmである。

16・19は2012年度に出土し報告した個体であるが、資料増加にともない再検討し、復元底径を修正して再度図化した。16の復元底径は16.4cm、19の復元底径は12.8cmにそれぞれ訂正した。

第 20 表 6 号墳出土土師器一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点	第 48 集 掲載 No.
			口径	底径	器高						
1	小型丸底壺	口縁部～頸部	(11.3)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：橙 内：黄橙	良好		墳頂 トレンチ	2014 年 出土
2	高坏	口縁部	(15.0)	—	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	良好 黒斑あり		墳頂 トレンチ	2014 年 出土
3	高坏	脚裾部	—	(12.0)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：橙 内：橙	良好		西 1 トレンチ	1
4	高坏	脚裾部	—	(14.0)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：橙 内：にぶい橙	良好		東 1 トレンチ	2
5	高坏	脚裾部	—	(16.0)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：にぶい橙 内：にぶい橙	良好		東 1 トレンチ	2014 年 出土
6	高坏	脚裾部	—	(19.9)	—	外：ナデ 内：ナデ	外：明黄褐 内：黄褐	良好		東 1 トレンチ	2014 年 出土
7	甕	胴部	—	—	—	外：ハケ・ユビオサエ・ナデ 内：ケズリ・ナデ	外：明赤褐 内：灰褐	良好	ハケメ単位幅広い。	東 1 トレンチ	7

※ () は復元径。黒斑は残存部に確認できるもののみ記述。

る。調整は外面にタテハケ後ヨコナデが、内面にヨコナデが施されている。外面には黒斑を有する。復元口径は 15.0 cm である。

5・6 は脚裾部片である。調整は内外面と端部に丁寧なヨコナデが施される。復元した脚裾端部径は 5 が 16.0 cm、6 が 19.9 cm である。過去に出土した 3・4 と比較するとやや大型である。

甕 (7) 2012 年度に出土し、報告したものを再度提示する。胴部は球形であり、底部は丸底と推測される。調整は、外面には 1 cm あたり 5～7 本のタテハケが施された後ナデが、内面には、胴部上半部に横方向のケズリが、下半部には縦方向のケズリが施されている。(豊永)

4. 小結

(1) 1 号墳出土遺物の時期

1 号墳からは鉄剣、壺が各 1 点ずつ出土している。

鉄剣は把の残存状況があまり良好ではなく全容がわからないため、関や茎の形態からその時期を決定したい。当古墳出土の鉄剣は、浅い直角関を呈し、茎は茎尻に向かってゆるやかに幅が細くなるといった特徴をもつことより、池淵俊一氏の研究における浅直・斜角関グループに属すると考える(池淵 1993)。このタイプのものは、4 世紀末から 5 世紀初頭頃に存在する。

壺は古墳時代において形態の変化が見られないため、その存続期間のみを確認する。壺は九州において 4 世紀中頃から 6 世紀代までその存在が確認されている(亀田 1985)。

以上、両者が重なる時期、4 世紀末から 5 世紀初頭頃に 1 号墳出土遺物の時期を設定したい。

(2) 3 号墳採集遺物の時期

前述の通り、3 号墳の採集遺物は埴輪片、土師器片、須恵器片である。小破片である埴輪片と土師器片は時期の検討が難しいため、今回は須恵器のみ時期決定を行う。3 号墳採集の須恵器片は 3 点とも甕の胴部片と考えられ、これらには全て共通の調整が施されている。

3 号墳採集須恵器の外面調整は、平行タタキの後に部分的なナデが施される。平行タタキの後にナデが行われるのは I 型式の 2 段階以降であり(中村 1978a)、これは田辺編年でいう TK 216 型式以降に相当する(田辺 1982)(以下、中村編年を明記する際には括弧内に田辺編年を示す)。また、II 型式以降(MT 15 型式以降)になるとほぼすべての個体の外面調整に、カキ目状の二次調整が施されることが知られており(中村 1978a)、この特徴は、3 号墳で採集されたものには見られない。したがって外面調整の特徴から見ると、これらの須恵器は I 型式 2 段階以降かつ、II 型式よりも前の時期(TK 216～TK 47 型式)に位置づけられる。

内面調整では同心円文当て具痕をナデ消しているが、うっすらと当て具の単位が見える。同心円文

当て具痕をナデ消すのはⅠ型式(TK 73～TK 47型式)の特徴であり、Ⅱ型式以降(MT 15型式以降)の個体には、同心円や円弧の当て具痕を明瞭に残したままにするものが大部分であるとの指摘がある(中村 1978a)。また、TK 73型式といった時期の古いものは当て具痕を丁寧にナデ消すが、時期が下るにつれてナデが雑になり、当て具の痕跡が完全には消えずに残るようになる。当古墳で採集された須恵器はうっすらと同心円文当て具痕が見られることより、TK 23型式段階頃に位置づけられる(木村龍生氏のご教示による)。

以上、内外面調整の特徴をあわせて検討すると、3号墳で採集された須恵器はTK 23型式段階頃に位置づけられ、これは集成編年8期頃に対応する。

(3) 6号墳出土遺物の時期

6号墳からは壺形埴輪片、土師器片が出土した。両者の時期決定は、昨年度までの報告においてもなされており、壺形埴輪は集成編年4期に、土師器は集成編年6期前後に位置づけられている(入江 2013、山元 2014)。

壺形埴輪の特徴と時期 まず、6号墳出土壺形埴輪の特徴を見ていく。2012年度の報告においても当古墳出土壺形埴輪の特徴について同様にまとめたが、その後の調査で明らかになったことも含めて再度、以下の10項目に特徴を整理した。

- A. 二重口縁壺形埴輪と単口縁壺形埴輪がほぼ同数存在する。
- B. 単口縁は外湾気味、または外傾しながら直線的に大きく開く。
- C. 二重口縁壺形埴輪の口縁部は、外湾する第一口縁部の上にそのまま第二口縁部を載せたような形を呈する。有段部は比較的明瞭に段をなす。また、第二口縁部は第一口縁部よりも短い。
- D. 胴部形態は長胴と推測される。
- E. 肩部の外面調整に装飾的なヨコハケをもつものがある。
- F. 底部は粘土紐の積み上げによって成形され、当初より底面を有さない。
- G. 底部外面の整形は、比較的底径の小さなものはユビオサエ、大きなものはケズリを採用する。
- H. 底部はわずかに肥厚している。
- I. 赤色顔料が塗布された個体がある。
- J. 黒斑をもつ個体がある。

以上の内、G・Hについては2012年度の報告において、「底部の器壁を薄く仕上げようという意図により、製作の最終段階においてツマミ整形あるいはケズリ整形による底部調整が行われる」と述べた(入江 2013 : p. 34)。しかし、この認識は誤りであった。再度底部の観察を行うと、薄く仕上がっている個体は第29図の16のみである(以下、第29図を省略し、遺物番号のみを示す)。16以外の個体はほぼ一定の器壁の厚さを保つ(17)か、底端部にいくにつれ、やや厚みを増している(15・18・19)。したがって、6号墳の壺形埴輪においては底部が肥厚する個体が主体的であり、ケズリにより底部が薄く仕上がる個体は、その存在が稀である。

また、出土資料の増加や、報告済みの資料における底径の再計測の結果を受け、底部をケズリで整形している個体(15・16)は、ユビオサエで整形されている個体(17・18・19)よりも底径が大きいことが明らかとなった。このことから、本来ならばユビオサエですませている底端部の整形を、調整を施す範囲が広い底径の大きな個体にはケズリを用いる事で、作業の効率化を図った事が推測される。したがって、底端部においては2つの整形技法が見られるが、これは底径の大小によって使い分けられているものと思われる。

次に、時期について見ていく。D・F・Hは時期を決める上で有用な特徴である。これらの検討を通して、時期決定を行いたい。また、2012年度の報告においてはJの特徴も時期を決めるために用いたが、今回は用いない。当古墳の壺形埴輪は黒斑をもつことより、野焼きによって焼成されたことがわかる。これを、6号墳出土の壺形埴輪が集成編年5期以前のものである根拠としたが、集成編年6～7期に位置づけられる長目塚古墳出土の壺形埴輪にも黒斑が見られることより、黒斑の有無による時期決定は難しいと考える。したがって、Jの特徴は時期決定に援用しない。

Dの胴部形態が長胴であるという特徴は、集成編年4期以降の壺形埴輪に見られる特徴である（高橋 1992、田中 1995、竹中 2004）。Fの底部が粘土紐の積み上げによって整形され、当初より底面を有さないという特徴も、Dと同じく集成編年4期以降の壺形埴輪に見られるものである（高橋 1992、田中 1995、竹中 2004）。Hの底部がわずかに肥厚する特徴についてだが、底部が肥厚する個体は集成編年4期にわずかに見られ、集成編年5期に主体的な要素となる（竹中 2004）。したがって、Hは集成編年5期に主に見られる特徴である。以上の検討より、6号墳出土の壺形埴輪は集成編年5期以降のものである可能性が高い。

2013年度の調査報告において、長目塚古墳出土の壺形埴輪と当古墳出土のものとの比較が行われた。長目塚古墳出土の壺形埴輪は底部が完全に肥厚化していることより、6号墳出土のものより後出すると推定された（山元 2014）。竹中克繁氏は長目塚古墳出土の壺形埴輪の再検討を通して、5期以降も壺形埴輪は存在する可能性を示唆している（竹中 2014）。同時に長目塚古墳出土の壺形埴輪を円筒埴輪の時期ともあわせて検討し、集成編年6期から7期前半に位置づけている。6号墳出土の壺形埴輪が長目塚古墳出土のものよりも前出である点、長目塚古墳出土の壺形埴輪が集成編年6期から7期前半に位置づけられる点から、6号墳出土のものは集成編年6期以前に属すると考えられる。

以上を総合して判断すると、6号墳出土の壺形埴輪の時期は集成編年5～6期である。

土師器の時期 6号墳から出土した土師器は、小型丸底壺・高坏・甕の3器種である。小型丸底壺は小破片であり、時期決定に用いることは難しいため、高坏・甕による時期の検討を行いたい。

高坏は杯部片と脚裾部片が出土している。杯部片による時期決定は難しいため、今回も脚裾部片によって時期を決めたい。2012年度と同様、今回出土した脚裾部片も、林田分類における高坏Aタイプのみである。これは主に、集成編年4期から7期初頭頃（林田編年1～3期）にかけて見られる。

甕は幅の広いハケメが施されることより、集成編年6期頃（林田編年2期）に位置づけられる（檀佳克氏のご教示による）。

以上、土師器は集成編年4期から7期初頭までの様相を呈しており、中でも甕は時期がより絞られ、集成編年6期頃の様相を呈する。したがって、土師器の時期は集成編年6期頃に設定したい。

壺形埴輪と土師器の時期を検討した。壺形埴輪は集成編年5～6期に、土師器は集成編年6期頃に属すると考える。底部に関する再検討を行ったことで6号墳の壺形埴輪の時期が下り、土師器の示す時期に近くなった。したがって、6号墳出土遺物の時期は集成編年6期頃であると考えられる。

(4) 1・3・6号墳の時期的関係について

各古墳から出土した遺物により、1号墳は4世紀末から5世紀初頭頃、3号墳は集成編年8期頃、6号墳は集成編年6期頃に位置づけられる。1号墳と6号墳は近い時期を示し、築造時期の前後関係は判然としない。3号墳では須恵器片が採集されており、1・6号墳には見られなかった須恵器を用いた祭祀が導入されていた痕跡が見受けられた。以上、1・6号墳の築造後、3号墳が築造されたと推測される。

(入江)

八 まとめ

今年度、平原古墳群南尾根グループ所在の1・2・3・6号墳に関するいくつかの情報が得られた。そこでこれらの古墳の特徴をまとめた後に、平原古墳群の再評価を行う。

1号墳 1号墳は熊本県教育委員会より提供された実測図の写しをもとに、主に石棺と石棺内外出土遺物の内容が明らかになった。1号墳石棺は主軸を東西にとる箱式石棺で、石材は安山岩である(島津1982:p.89)。棺身は小口石と長側石からなり、底石をもたない。小口石はそれぞれ1枚、北側長側石は1枚、南側長側石は2枚で構成される。1号墳は墳丘をもたない可能性が高い。棺内からは人歯・頭骨・四肢骨と副葬品の鉄剣1点、堅櫛1点が出土している。人骨は2体分である(島津1982:p.89)。被葬者の頭位は東の可能性が高い。また、棺外からは土師器片と赤色顔料が塗布された石材が出土しており、棺外祭祀に用いられたものと推測される。

出土遺物の内、鉄剣と堅櫛は調査を行えた。鉄剣は浅い直角関を有し、茎が茎尻にむかってゆるやかに細くなる特徴から4世紀中頃から5世紀初頭に位置づけられる。堅櫛は湾曲結歯式である。九州では、堅櫛は4世紀中頃から6世紀代まで確認されている(亀田1985)。これら遺物の時期から、1号墳の時期は4世紀末から5世紀初頭と推定できる。

1号墳は2号墳の南東側に位置していたが、1981年の県道213号線拡幅工事により消失した。

2・3号墳 2・3号墳では測量調査を行った。2・3号墳は6・7号墳と同じ尾根上にある。2・3号墳は近接して築造されているが、6・7号墳とは離れている。2号墳は東西27.6m、南北25.8m、高さ3.5～5.9mの円墳と推測される。墳丘の周囲南側には幅1.5～2.0mの墳端平坦面が確認できる。現状の地形からは周溝は確認できない。墳頂平坦面の大きさはおよそ東西10.2m、南北6.9mである。3号墳は方墳の可能性はあるが、確定的ではない。方墳であれば、3号墳の墳丘規模は東西辺20.1m、南北辺21.3m、高さ1.1～3.8mと推測される。墳丘の周囲南東側には幅1.5～2.5mの墳端平坦面が確認できる。現状の地形からは周溝は確認できない。墳頂平坦面の大きさはおよそ東西9.0m、南北6.3mである。

3号墳では埴輪片、土師器片、須恵器片が採集された。土師器は高杯、須恵器は甕である。須恵器甕の胴部外面には平行タタキのちナデが施され、胴部内面には同心円文当て具痕をナデ消すも、かすかに当て具痕が残る。このような特徴から須恵器甕はTK23型式段階頃に位置づけられる。須恵器の時期から、3号墳の時期は集成編年8期頃と推定できる。

また、これまでも4・5号墳の存在は疑問視されていたが(杉井2013)、今年度の測量調査により4・5号墳が存在しないことが確定した。

6号墳 6号墳では第3・4次調査に引き続き、発掘調査を行った。今年度の第5次調査では墳丘東側と墳頂面に調査区を設けた。墳丘東側では段築1段目と段築テラス面、段築2段目、墳頂平坦面を新たに検出した。段築テラス面には小礫が敷かれていた。過去の調査において、墳丘北側と西側とでは段築1段目基底石から墳頂平坦面にかけて標高差が縮まる様子が確認されており、墳丘東側でも墳丘北・西側との標高差が縮まる様子が確認できた。また葺石の構築技法が一部判明した。段築1段目では大きい石材で3箇所平坦面を斜面途中に形成しながら石材が葺かれていた。斜面に葺く石材は段築下部では大きく、段築上部では小さい傾向にあった。平坦面形成の目的は石材を斜面に葺く際の足場の構築および葺石の崩落防止と推測される。段築2段目では4箇所の平坦面を認識した。平坦

面や斜面に用いられる石材の多くは小さく、大きな石材は部分的に使用される。また平坦面の前後で大きな石材を用いて傾斜を立ち上げる特徴も見られた。段築2段目における平坦面の形成の目的は、小さな石材が多用されることから葺石の崩落防止のみと推測される。大きな石材を用いて傾斜を立ち上げる目的は墳頂平坦面において標高差を最小限にすることと推測される。墳丘斜面で小さな石材を中心に大きな石材を組み合わせる目的は、葺石の崩落防止と作業の安定性の向上と推測できる。

墳頂平坦面には小礫が敷かれていることを確認した。墳頂部は異なる質の土を細かく重ねた後に、化粧土を一面に盛り、小礫を敷くことで形成されていた。また盗掘坑と考えられる掘り込みを検出できたが、埋葬施設の確認はできなかった。

これまでの6号墳に関する調査成果もふまえると、6号墳は東西約31 m、南北約30 m、高さ3.7～5.6 mの2段築成の円墳と推定される。墳端平坦面は幅1.9～2.0 mと推測される。墳端平坦面には礫が敷かれていない。墳端平坦面は基本的に地山を整地して成形されるが、墳丘南側では旧地形の制約により、地山を整地した後に盛土をして成形される。周溝は存在しない。段築テラス面には小礫が敷かれており、段築テラス面の幅は北側で1.5 m、東側で1.4 mと推測される。墳頂平坦面は東西12.6 m、南北9 m程度の楕円形を呈すと推測される。

遺物は壺形埴輪片と土師器片が出土している。原位置を留めたものはない。壺形埴輪には単口縁と二重口縁がある。これまで壺形埴輪の時期は集成編年4期としていたが(入江2013、山元2014)、今年度訂正した。6号墳の壺形埴輪の時期を決める特徴として長胴の胴部形態、成形段階から底面をもたないわずかに肥厚した底部が挙げられる。そして長目塚古墳の壺形埴輪の評価(竹中2014)から、6号墳の壺形埴輪は集成編年5～6期に位置づけられると考えた。土師器は小型丸底壺・高坏・甕が確認された。土師器の時期は過去の評価と変わらず、集成編年6期頃である。これら出土遺物の時期から6号墳の時期は集成編年6期頃と推定される。

平原本古墳群 さて、今年度報告した1・2・3・6号墳の内、時期が判明している1・3・6号墳は古墳時代中期に収まる。肥後地域においては中期前葉から、それまで主流であった海沿いにすすむルートに加えて、河川づたいにすすむ内陸ルート、熊本平野の東端をすすむ内陸ルートが新しく整備されることが言われており、阿蘇地域も内陸ルートの1つに入る(杉井2010)。このことから平原本古墳群の首長層は、古墳時代中期の新たな交通ルートの整備を背景に台頭した首長層の1つと考えられる。1号墳の被葬者の性格は判然としない。しかし6号墳が平原本古墳群南尾根グループ最大の古墳であることから、6号墳の被葬者が阿蘇地域の交通ルートを担う首長の1人であったことは推測できる。一方、3号墳は墳丘規模が小さくなり、墳形は方墳の可能性もある。この段階で、平原本古墳群に葬られる首長の性格が変わったとも考えられる。今後、3号墳と同じ集成編年8期頃に位置づけられる他の古墳との比較検討を通じて、解明されるべき問題である。

今後の課題 今年度の調査では、目的とした6号墳の埋葬施設・墳頂平坦面・段築構造の解明および2・3号墳の墳丘の状況と古墳分布の確認を一定程度達成することができた。また課題であった、6号墳出土の壺形埴輪と土師器の編年的位置づけの差を解消した。しかし埋葬施設を確認するには至らず、段築構造も6号墳の墳丘南側は未だ不明な部分が多い。これらの問題の解決には新たな調査区の設定が必要となる。その他、平原本古墳群北尾根グループにおける古墳分布の確認も課題として残る。さらに3号墳の墳形および2・3号墳の墳丘規模の解明、一切不明な2号墳の築造時期や1号墳の関連資料の確認など新たな課題もある。今年度の調査で明らかになった点はいくつかあるものの、未解決の課題は多い。次年度以降も調査を続け、平原本古墳群の全容把握に努めたい。(與嶺)

引用・参考文献

- 阿蘇町教育委員会 1989『小倉林道石棺発掘資料』
- 阿蘇町町史編さん委員会 2004a『阿蘇町史』第1巻 通史編 阿蘇町
- 阿蘇町町史編さん委員会 2004b『阿蘇町史』第2巻 資料編 阿蘇町
- 池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察－古墳時代前半期の刀剣類を中心として－」『古代文化研究』1 島根県古代文化センター：pp. 41-104
- 入江由真 2013「壺形埴輪」『考古学研究室報告』第48集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 30-35
- 緒方 徹編 2000『阿蘇町遺跡地図－阿蘇町遺跡詳細分布調査－』阿蘇町教育委員会
- 緒方 徹編 2011「附論 平原B遺跡－平原B遺跡内発見の火葬墓緊急調査－」『宮山遺跡』Ⅱ 阿蘇市文化財調査報告第2集 阿蘇市教育委員会：pp. 173-193
- 亀田 博 1985「堅櫛」『末永先生米壽記念論文集』乾 末永先生米壽記念会：pp. 465-504
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会：pp. 1-70
- 川村雪絵 1999「古墳時代の堅櫛」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集 大阪大学考古学研究室：pp. 281-306
- 清田純一編 1982『陣内遺跡』阿蘇町文化財調査報告第2集 阿蘇町教育委員会
- 熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』
- 島津義昭 1982「阿蘇の古墳」『えとのす』第19号 新日本教育図書：pp. 85-96
- 島津義昭 1983「阿蘇の先史時代」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 32-37
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会：pp. 131-184
- 杉井 健 2011「熊本県阿蘇市中通古墳群の基礎的研究1－東岳川西側の古墳群名称の整理」『熊本古墳研究』第4号 熊本古墳研究会：pp. 13-22
- 杉井 健 2013「調査経過と古墳分布」『考古学研究室報告』第48集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 16-21
- 清家 章 2001「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』第152号 古代学研究会：pp. 1-18
- 高橋 徹 1992「九州」『古墳時代の研究』第9巻 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣出版：pp. 81-89
- 竹中克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論－壺形埴輪の変遷とその意義－」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：pp. 13-32
- 竹中克繁 2014「埴輪」『長目塚古墳の研究』2010～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 熊本大学文学部：pp. 69-83
- 田中裕介 1995「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期（上）－埴輪と墳丘形態からみた大分の首長墳の編年－」『おおいた考古』第7集 大分考古学会：pp. 41-77
- 田辺昭三 1982『須恵器大成』角川書店
- 玉川剛司 2014「漆生古墳群測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』4 豊後大野市教育委員会：pp. 4-12
- 留野優兵編 2014「平原古墳群調査報告2」『考古学研究室報告』第49集 熊本大学文学部考古学研究室
- 中村 浩 1978a「考察」『陶邑』Ⅱ 大阪府教育委員会：pp. 210-243
- 中村 浩 1978b「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ 大阪府教育委員会：pp. 168-241
- 野田拓治 1983「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 38-49
- 林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中期・後期の土師器－その編年と地域性－』九州前方後円墳研究会：pp. 117-144
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社：pp. 24-26
- 文化財研究会 1983「阿蘇町小倉古墳群第一次測量調査報告概要」『熊本短期大学連合会会報 研究論集』第38号 熊本短期大学：pp. 81-91
- 文化財研究会 1984「実験考古学の私的見解と小倉古墳群第二次測量調査概要報告」『熊本短期大学連合会会報 研究論集』第39号 熊本短期大学：pp. 63-75
- 松本幡郎 1983「阿蘇の成り立ち」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 84-90
- 安田未来編 2013「平原古墳群調査報告1」『考古学研究室報告』第48集 熊本大学文学部考古学研究室
- 山元瞭平 2014「出土遺物」『考古学研究室報告』第49集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 22-26
- 渡辺一徳 2001『阿蘇火山の生い立ち』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書7 一の宮町

挿図出典

- 第1図 安田編2013
- 第7図－1 緒方編2000